MITIS Journal

VOL.4 NO.1

DECEMBER 2023

MIZUNO INSTITUTE FOR TRANSLATION

AND INTERPRETING STUDIES

MITIS Journal Volume 4 No.1 (2023)

目次

論文
英日逐次通訳訓練と視点の操作

南津佳広
金井啓子
吉田国子
春木茂宏 1

論文
『ドリトル先生航海記』新旧訳対照研究
――「しゃがむ」児童文学翻訳におけるコミュニケーション重視訳―

セランド修子 17

翻訳
文学作品はいかに国境を越えるのか（あるいは越えないのか）？
――世界文学への社会学的アプローチ

ジゼル・サピロ（秋草俊一郎訳） 31

復刻・対訳・評釈
復刻・対訳（順送り訳）・評釈の試み―ベンヤミン『写真小史』２

三ツ木道夫 47

投稿規定 65

編集後記 69

論文

英日逐次通訳訓練と視点の操作

南津佳広（大阪電気通信大学）
金井啓子（近畿大学）
吉田国子（東京都市大学）
春木茂宏（近畿大学）

Abstract

This paper investigates strategies employed in training English-to-Japanese consecutive interpretation, specifically focusing on the translation of inanimate subject sentences within the context of translation in language teaching (TILT). The study incorporates field theory to analyze students' translations, considering interpreters' viewpoints and cognitive load. Through a detailed examination of student translations, it becomes evident that achieving a stable interpretation of English inanimate subject sentences into Japanese is linked to the shift from an external to an internal perspective within the field. As student interpreters adopt a field-internal perspective, embedding themselves in the target language (TL) field and perceiving the field, composed of multiple participants, as a unified entity, they demonstrate stable interpretation with reduced memory load. This study suggests that, in the realm of English-to-Japanese consecutive interpretation training, considering perspective and cognitive load may contribute significantly to enhancing trainees' translation skills.

1. はじめに

学部レベルにおける英日語間の通訳の授業にて、（１）のような英語の無生物主語文の原発言（Source Language: SL）に出くわすことがある。すると、たとえ短い文であったとしても受講者は訳出に苦戦する。

（1）A powerful ocean storm hit Taiwan on Tuesday.

もしこれを適切な日本語で逐次通訳するとすれば、（２）のような訳出が想定されよ

English Title: English-Japanese consecutive interpreting training and manipulation of viewpoints

う。

（2）台湾は火曜日に大型台風の直撃を受けました。

ここでは、SL において文法的に要請されていない要素である「受けた」を付加して話者が主体的に体験したかのように言語化している。ところが、学部レベルの通訳の授業では、受講者の多くは高校卒業までは、英文の文法規則に字義通りの日本語の意味を結びつけて訳させる文法訳読（Grammar-Translation: GT）を行い、この GT の訳出が「正確だ」と評価されてきた経験を重ねてきている。そのため、このような自然現象を述べた英語の無生物主語文を日本語に逐次通訳する場合(2)のような語用論的操作を加えた訳出言語（Target Language: TL）を生成するのはむずかしい可能性がある。したがって、自然現象を主語にした(3)のような GT で日本語に訳出すれば、受講者にとっては認知的負荷がかからずに訳しやすいのではないだろうか。

(3) 火曜日に、大型台風が台湾を直撃しました。

ところが、実際に受講者に(1)を日本語に逐次通訳させたところ、(3)のようにすら訳出できていない受講者がいることが分かった。そこで、同じ受講者を対象にして(1)を試しに日本語で翻訳させたところ、受講者のほとんどが(3)のように訳出した。ここで問題となるのは、なぜ受講者は(1)を翻訳すると(3)のように訳出できる十分な英語運用力を持ち合わせているにもかかわらず、通訳となると訳出に失敗してしまうのかである。

本稿では、学部レベルの言語教育における通訳翻訳（Translation in Language Teaching: TILT）の英→日逐次通訳での無生物主語文の訳出を中心に、2 点を分析した。それは、①視点の変更と②それに伴う言い換えが受講者にどのような記憶の負担を強いるのかである。2 節にて受講生が無生物主語文でつまずく要因を議論し、3 節では授業の概要を概説する。4 節では場の理論を導入して、続く 5 節にて場の理論をもとに無生物主語文の受講生の通訳を分析し、6 節にて議論をまとめる。

2. なぜつまずくのか

英語と日本語の視点の違いをめぐって、これまでさまざまな研究が行われている。ここでは紙幅の関係上詳細な議論は行わないが、代表的なものとしては、英語では話者は観察者としていわゆる「神の視点」で問題となるでき事を外側から客観的に把握する傾向が高く、そのため無生物主語文が多用されるという（金谷 2019 参照）。その一方で、日本語では問題となるでき事の中に自らの身を置くことで、当事者としていわゆる「虫の視点」でそのでき事を主観的に把握する傾向が高いという（池上 2011、

岡 2022、金谷 2019 参照）。

たしかに受講者の英→日逐次通訳での訳出を精査すると、英語でも人が主語の文については安定的に日本語に訳出できている。これはおそらく、受講者が逐次通訳を行うときに、英日両語の視点違いを乗り越える負荷がかからないからだろうと考えられる。しかしながら、1 節にて上述したように、(1)のような英語の無生物主語文に出くわすと、受講者は(2)はおろか、(3)のような日本語に逐次通訳すら行うことができない。GT に慣れているのであれば、(3)のように訳出するのはさほど問題はないであろう。ではなぜ逐次通訳となると訳出に失敗してしまうのであろうか。

ここで考えられる要因は、逐次通訳における記憶と時間の制約である。翻訳とは異なり逐次通訳では視覚的に SL を振り返ることができないために、SL の発話内容を TL へと訳すにあたり通訳者はメモや記憶に頼るしかない。その上、逐次通訳では原発言者が話し終えると通訳者は直ちに訳し始めなくてはならない慣習があるため、翻訳と比較して SL と TL の等価をはかるべく構造や表現を吟味する時間が圧倒的に短い。そのために、容量限定的な認知資源がそこに割かれる傾向がある。このように、逐次通訳独自の記憶の負荷と時間の制約が課せられるために、受講生が(1)の訳出につまずくのではないかと考えることは、一見すると妥当な議論のように思われるかもしれない。ところが問題はそれほど簡単に解決できそうにない。上述したように GT に慣れている受講生であれば、GT を行うことがある程度自動化されているはずである。そして、GT を行って日本語でも無生物主語文で訳出すれば訳出につまずくことはない。なぜならば、視点の違いを乗り越える必要はなく、そのため自ずと記憶の負荷も軽減され、時間の制約に認知資源を割く必要もないはずだからである。

そこで今回の研究では、英→日の逐次通訳で以下の 2 つのリサーチ・クエスチョンをたてて分析を行った。

(4)リサーチ・クエスチョン

(a) 逐次通訳において視点の変更と認知的な負荷は関係するのか

(b) 英日逐次通訳で無生物主語文の訳出を促すにはどのようにしたらいいのか

3. 授業実践

本稿では、関西圏の私立大学で英語を専門とする受講生の専門科目として 3 年生向けに開講されている通訳基礎の授業 2 クラスを対象に比較検討を行った。それは、(a) SL の統語的な正確さを重視して訳出するクラス（以後、文法群）と（b）SL の発話意図や、文脈・フレームなどの語用論的情報を重視して訳出するクラス（以後、語用論群）である。２クラスの受講生が、無生物主語文をどのように訳すのかを比較して検討した。文法群では、受講生に文法項目に認知資源をついやして訳出するように促

す一方で、語用論群では SL の文脈や百科事典的知識、SL の発話のフレームなどを意識して適切な日本語で訳すように促した。また、授業の実践は、2023 年の 4 月から 9 月にかけて実施した。また、受講生の英語運用力の目安として、TOEIC の平均が約 700 点であった。では授業の流れを見ていこう。

表 1. 授業の進行

週	内容
1	通訳行為についての概説
2～7	通訳スキル獲得のための基礎訓練 （プロソディック分析・シャドーイング・サイトトランスレーション・ノート・テーキング）
8～11	ショートニュース（VOA Special English）の逐次通訳
12-14	受講生によるショートスピーチの逐次通訳

1 週目に通訳行為について概説し、2 週目から 7 週目にかけて逐次通訳を行うための基礎的なスキルを獲得するための訓練を導入した。今回導入したのは、プロソディック分析とシャドーイング、サイト・トランスレーション、ノート・テーキングの 4 つである。逐次通訳を行うためのスキル獲得訓練をこの 4 つに絞った理由は、SL の発話意図の獲得を促すことと日常のコミュニケーションでは経験しない認知的な負荷をかけることで、認知資源の適切な配分を意識させることにある。各スキルを導入する段階では、講師が各スキルを導入する目的と訓練方法を受講者に提示した。本稿で提示した各スキル獲得の目的は以下の通りである。

(5) 提示したスキル獲得の目的

(a). プロソディック分析：受講生が英語の音声変化のパターンを体系的に理解することで、SL の構音解析を促す。さらに、受講生が文ストレスを置く箇所を認知することで、SL の発話意図を獲得するのを妨げる音韻的要因を排除する。

(b). シャドーイングについては、日常コミュニケーションでは経験しない認知的負荷をかけることで、容量限定的な認知資源の配分を探りつつ、理解しながら話すという同時並行作業を行う。さらに、SL の情報の提示順に漸増的に理解して、SL の発話意図を獲得する。

(c). サイト・トランスレーションについては、SL 情報が提示される順に漸増的に理解しながら SL 発話意図を獲得するところまでは、シャドーイングと目的は原則的に同じである。さらに、TL へ訳すプロセスを課すことで、受講生が SL を聴いて理解した内容をそのまま TL に訳すのではなく、SL で伝達しようとする意図をいかに TL で正確かつ適切に話すかを意識させる。

(d). ノート・テーキングについては、容量限定的な記憶の制約を助けるためにメモをする。SL の聞き取りを阻害しないために、最小限のコストで最大限想起できる表記を使用して、構造的にメモする。

授業では実際に受講者が 4 つの訓練を実践しては内省し、教員がその内省も併せて受講者のパフォーマンスをフィードバックした。さらに各スキルの獲得をより促すために、授業時間外の課題として訓練を行わせ、その結果を受講者に録音して提出させ、講師が毎回フィードバックのコメントを出した。

その後、8 週目から 14 週目にかけて、VOA Special English を使用しつつ、受講生に 3 分程度のショートスピーチを作成させ、通訳の実践練習を行った。なお、逐次通訳を行う上で、実際の逐次通訳現場に照らして、以下の 3 つのルールを課した。まず、分からないからと黙ることを禁止して、必ず何かしらの情報を訳して、かつ、できるだけ文単位で訳すこと。次に、話し手が話し終えたらオーディエンスが通訳者の能力に対して不安を覚えないように 3 秒以内に訳しはじめること。最後に、原発言者が話す時間に対して TL の訳出にかける時間もできるだけバランスをとることである。

そこで、逐次通訳の実践として、8 週目～11 週目で取り上げた VOA Special English のうちのひとつと、その訳出例を見てみよう。講師が SL の英語を 1 文ごとに区切り、文法群と語用論群の受講生にメモ付きの逐次通訳を行わせた。

[SL]

IN WEATHER NEWS: (1) A powerful ocean storm hit Taiwan Tuesday. One person was killed; 10 others are missing. (2) Rain and strong winds have caused landslides and flooding. (3) This is the second major ocean storm to hit Taiwan this year. Experts believe the storm will grow weaker as it moves across land. However, they say the storm could regain strength as it moves across the Taiwan Straits toward China's southeast coast.

この中で特に注目したのは、下線部(1)−(3)の無生物主語の文である。この箇所は、上述したように GT に慣れている受講生にとっては、GT で無生物主語の日本語として訳して、それを正確な訳として判断するのであれば、GT に慣れている受講生には比較的訳しやすい箇所とも言えよう。そこで、両群の訳出を比較してみよう。(6)と(7)を見ていただきたい。受講生の訳出における下線部は SL では述べられていない要素を表し、[ ] は受講生が訳せなかった SL の要素である。

(6) 文法群の訳出例

SL	A	B	C
A powerful ocean storm hit Taiwan Tuesday	火曜日に。台風あれ？火曜日に台風が台湾に直撃しました。	台風が台湾に[hit]しました。火曜日に。	火曜日に、海から発生した大きな台風が台湾に直撃しました。
Rain and strong winds have caused landslides and flooding.	[Rain and strong winds have caused landslides and flooding]	[Rain and strong winds have caused landslides and flooding]	その台風によって、ええ、雨、強風、土砂降り[have caused]、[landslides and] 川の氾濫が起きています。
This is the second major ocean storm to hit Taiwan this year.	なんで？で、ええ、[to hit Taiwan this year] [major]台風は 3 回目で [second]。	で台湾。この、この台風は 2 回目で、来週、[major] 台湾に直撃したものが [this year] 2 回目に、2 回目であるに向かって。大変。	この台風は[this year] 台湾に直撃した2つ目の台風です。

(7) 語用論群の訳出

SL	A	B	C
A powerful ocean storm	火曜日に台湾に台風がヒットしました。	火曜日に、台湾で台風が直撃しました。	火曜日に台湾が直撃しました。
Rain and strong winds have caused landslides and flooding.	大雨と強い風により、土砂崩れや洪水が起こりました。	雨 [and] [strong] [winds] で [landslides] 洪水が起こりました。	雨や強い風の影響で、土砂崩れや浸水被害が起きました。
This is the second major ocean storm to hit Taiwan this year.	そして、それは今年で [second] 大きな台風でした。	この台風は、今年に [to] [hit] [Taiwan] 2 つ目の大きい台風であり、	[to] [hit] [Taiwan] [this] [year] 2 番目に大きな台風に。

3 つの無生物主語文に対する両群の訳出例を比較すると、文法群の方が訳語を多く欠落させているために、適切にはおろか、正確にも訳せていない箇所が多いことは明らかである。これは何を意味するのであろうか。

ここで考えられるのは、文法群の受講生による記憶の飽和である。上述したように、文法群では、文法項目に認知資源をついやして訳出するように促す一方で、語用論群では話の流れを意識して適切な日本語で訳すように促した。(6)の文法群の受講生の訳出を精査したところ、入力される SL を、語などの情報の断片ごとに理解を積み重ねようとするボトムアップ処理の方略を使用した可能性が高い。つまり、入力される各単語やフレーズを記憶するためのチャンクとして認知するため、受講生の記憶が飽和してしまい、容量限定的な認知資源を後続する情報に向けられなくなり、記憶

が飽和して訳出ができなくなったのであろうと推測される。例えば、SL の“Rain and strong winds have caused landslides and flooding.”では文法群の A と B ともに訳出できていない。また、 “This is the second major ocean storm to hit Taiwan this year.”でも、A は SL から「台風」しか拾えず、B は冒頭の“the second”と“major ocean storm”を個別に認知して訳出している。「2 回目」を最後に繰り返して訳していることからも “the second major ocean storm”をひとつのチャンクとして認知していないと考えられる。一方、(7)の語用論群の受講生の訳出を精査すると、文脈やフレームを意識して理解し、省略できる箇所は省略し、メッセージ全体を伝達しようと試みる方略で訳出した様子がうかがえる。

次に、メモを精査すると、下線部(1) − (3)では、語用論群の受講生は文を構成する要素について何かしらメモしていたのに対し、文法群の受講生は、C を除いて文を構成する要素について何も記載していなかった。このことからも、文法群はボトムアップ的に聞き取ろうとしたために、SL の聴解段階で記憶が飽和し、後続する情報の解析に認知資源を向けられずに、メモにすら書けていなかったと考えられる。

両群とも逐次通訳をするための基礎的なスキルは同じように習得しているはずなのに、文法群の受講生は記憶が飽和し正確な訳出すらできていないのに対し、語用論群の受講生は、適切さはやや落ちるものの記憶の飽和を回避して訳せた要因は何であろうか。そこで、本稿では、①言語固有の視点と②場と③認知資源と記憶の関係から分析する。そして、語用論群の場内在的視点から場をひとつのチャンクとして捉えることで、記憶が飽和することがなく通訳することができると主張する。

4. 場の理論

内山（2010）は英日語間の通訳翻訳に焦点を当て、統語に着目した訳出を促している。確かに統語は SL の理解に欠かせない重要な要素であることは間違いない。だが、（3）の文法群の訳出例を見たら分かるように、記憶が飽和してしまい、認知資源を記憶に割くことができなくなってしまう。

次に、西光（1999）は、「人間主語対無生物主語の選択の傾向は日英語の基本的な違いではなく，動詞の選択に依存して起こるということがはっきりする」（西光:5）と述べ、日本語は「無生物主語＋自動詞」が多用されると主張する。また、角田（1991）は、名詞句の階層性が無生物主語他動詞文の容認性の問題にも関わっていると主張する。このように、日本語の無生物主語文をめぐる容認性については、統語的な要素に着目しても統一的に説明することは難しい。

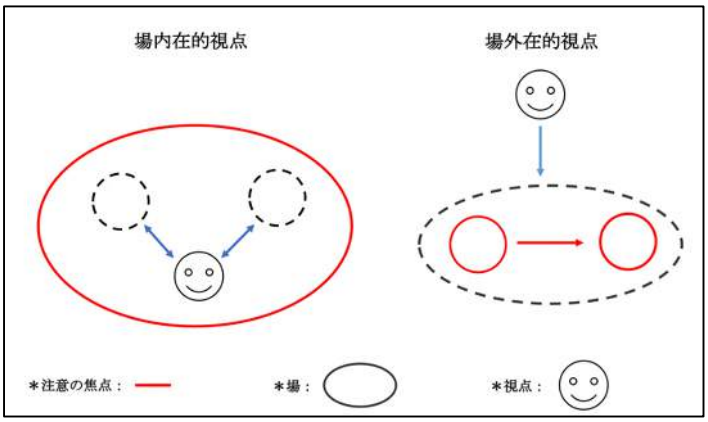
確かに、日本語も他の言語と同様に複雑な言語体系であるため、日本語の言語使用の容認性について統一的な説明を行うことは難しいかもしれない。さらに、通訳者の言語使用となると、通訳独自の訳出にかける時間と記憶の制約も考慮に入れなくては

ならない。逐次通訳では、通訳者がいちいち個別の容認性の基準をひとつひとつ想起し、当該表現の訳出をめぐってそれらをいちいち当てはめて検証する時間も記憶の容量も足りない。そのため、個別の容認性の基準を想起して、それをもとに訳出することは現実的とは言い難い。そこで、本稿では、通訳訓練を介した言語教育でのフィードバックもできうる容認性の基準について、「場の理論」を導入し、この理論をもとに受講生の訳出を検討したい。

井出（2020）によると、「場の理論」とは、話し手を全体の一部と考え、「話者は自己の内側に場の全体を映し、全体の中に位置づけた自己を自覚して話すという発話モデル」である。ここでいう場は、実体として現実世界に存在する場だけではない。認知主体が意識する事態や、メタレベルの場まで措定し（井出 2022）ている。場の内部では「発話のコンテクストや発話の状況といった発話に関わる場の要素が、全体の内側に自己と共に不分離の状態で存在すると捉え」（井出 2020:6）られている。また、「全体にはいろいろな要素が相互作用して絡み合って存在しているが、話者はその離れがたく繋がっている諸要素の一部が自分であるとの自覚を持って話すと考える」（井出 2020:6）とされる。場内在的視点からでき事を捉えるときには、場全体に焦点を当て、場の中では主他未分な状態で場全体を描写するように言語化する。一方、場外在的視点からでき事を捉えるときには、場のいわゆる参与者に焦点を当て主他が分離され個を意識して言語化するというのである。

つまり、これまで行われてきた日本語と英語固有の視点によるでき事の主観的把握と客観的把握の議論とは一線を画し、場内在的視点による描写なのか、場外在的視点による描写なのかという観点から分析を行う。このことは、言い換えれば、図 1 で示すように、場内在的な視点ででき事を捉えるときには場そのものに認知資源を向け、場そのものをチャンクとして捉えていると考えられる。一方で、場外在的な視点ででき事を捉えるときには、個々の参与者に認知資源を向けるため、それらを個別にチャンクとして捉えてしまうのではないかと考えられる。

図 1. 場と焦点



そこで、(1)を見てみよう。“A powerful ocean storm hit Taiwan Tuesday”は場外在的な視点で台風が火曜日に台湾に直撃したこと述べている。だが、これを日本語に訳した(2)の「台湾は火曜日に大型台風の直撃を受けました」いわゆる自然現象を描写した現象文である。ここでは、認知主体は台風が台湾を直撃したという認知主体が意識する場の中にありながら、この事態とは一定離れてそれを見ているとも言える。さらに、直撃を「受けた」と経験的に述べているが、これは認知主体が台湾に自己を重ねあわせて台風が上陸している事態の中に入り込んで直接影響を受けているのではなく、あくまでも認知主体が意識する場の中で体験しているのである。その点では、現象文は岡（2022）が述べるように、場内在的であり、かつ、場外在的であり、視点の主客分離の観点では統一することが難しいのだ。日本語にはこのように場内在的かつ場外在的な視点で述べることもあるため、英語の無生物主語文の訳出には戸惑ってしまうのではないだろうか。

通訳は、原則的に通訳者自身の解釈を挟まずに、原発言者のメッセージ（発話意図）をできるだけ忠実に伝える行為である。通訳者は、自分が原則的に聞き手のように話を聞き、自分自身が話すように他言語で話す。ここで、「できるだけ」と述べているのは、英語と日本語のように言語的距離が大きくかけ離れている場合、動詞と述語が鏡像関係となり記憶の負荷をかけて遅延して統語的正確さを保持しなくてはならないからである。さらには、アスペクトやモーダル、指示関係など言語固有の制約に合わせて操作を加え適切さを保持しなければならないからである。

これまで通訳のプロセス研究では、Seleskovitch & Lederer (1989) の解釈理論を精緻化しようと Setton (1999) や Gallai (2022) のように、語用論的なモジュールを想定したモデルが提唱されている。だが、いずれも英語のような主客分離型の作業言語間での通訳を想定して議論されている。このような作業言語間では既存のモデルで議論を深めることができるであろうが、日本語のような主客非分離の言語が作業言語に加わると、必ずしもそうとも言えない。なぜなら、日本語のように主客非分離の言語では、命題を構成する Agent が必ずしも言語的にマークされてはおらず、それが人となるのか自然現象などの無生物となるのかは、視点をどこに置くのかによって決まるからである。これは、統語的正確性や意味論の範疇ではなく、語用論的な範疇である。しかしながら、既存の通訳プロセスの理論では、この視点と訳出に関する研究は行われてこなかった。

そこで、井出（2022）を参照に通訳者の「場」の認識について考えてみよう。通訳者が原発言者の発話した言語形式から推論を働かせて発話意図を導出する。この発話意図は通訳者が発話の文脈情報や百科事典的知識から通訳者が意識する領域の中で形成される。この意識する領域こそ通訳者の「場」である。英日語間の通訳の場合、通訳者は訳出する言語に合わせて「場内在的な視点」で体験的に描写をするか、「場外

在的な視点」で観察的に描写するかの選択を行う。このように、通訳を行うにあたり、視点をどこに置くのかを受講生に意識させることで、通訳独自の時間的制約や記憶の制約を乗り越える安定的な通訳を促すことができるのではないかと考えられる。

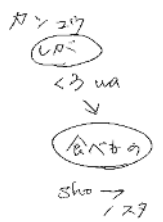
5. 訳出分析

次に、12—14 週目に行われた受講生スピーチの通訳のパフォーマンスを見てみよう。ここでは、受講生が英語話者としてスピーカー役をする。もう一人の受講生が英日通訳者の役割をする。そして、残りの受講生は日本語しか分からないオーディエンスとして参加する。ここでは、スピーカー役と通訳者役の受講生が事前に打ち合わせを行う。その際に、スピーカー役の受講生は、通訳者役の受講生のために単語リストを作成して渡す。その上で、どのようなテーマでどのような概要で話すのかを打ち合わせ、その他、訳出が難しいと想定されるスピーチで使用する表現集を通訳者に予め渡しておく。その打ち合わせが終わったら通訳をすることになる。なお、ここでもノート・テーキング付きの英日逐次通訳を行った。

ここで、ピアスピーチの逐次通訳を事例に、文法群と語用論群の無生物主語文の訳出例を取り上げる。文法群では「場外在的視点」で訳すると参与者ひとつひとつに意識を向けてしまうために記憶が飽和してしまい、正確さも適切さも担保されない。一方、語用論群は、語用論群の「場内在的視点」から訳出する方が、複数の参与者から構成される場をひとつのチャンクとして捉えることで、容量限定的な記憶（認知資源）を節約していると思われる。そのため、後続する情報の解釈に認知資源を振り分けることができるため、情報の漏れはまだあるものの、記憶が飽和することがなく通訳することができると主張する。

5.1 文法群の事例

(8)

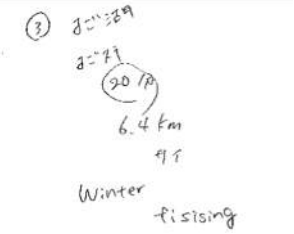
SL	TL	ノート・テーキング
Many of the shops are housed in historic buildings, creating a nostalgic atmosphere.	ショッピングなどは非常に懐かしい感じがします。多くの店舗は歴史的な建物に入っており、懐かしい雰囲気を醸し出しています。	

SL では歴史的地区にあるお店を場外在的視点で描写している。つまり、歴史的な地区という場を設定し、歴史的な建物に店舗が入居している様子に対し、ノスタルジックであると意見を述べている。場外在的視点の描写は場の参与者に焦点を当てている

ため、この視点を保持して統語的に正確に訳そうとすると、個々の参与者をそれぞれひとつのチャンクとして記憶しなくてはならない。そのため通訳をしている当該受講生は記憶が飽和してしまったのだろう。ショップという場所について述べている箇所が「ショッピング」という行為に変えて訳され、「非常に」と SL では述べていない表現が付け加えられ、お店がノスタルジックな雰囲気を醸し出している状況を描いた描写を「買い物をする行為がノスタルジックである」と訳されている。

メモを精査すると、お店の箇所には “sho” と描かれていた。通訳者をしている受講生が場の記憶が飽和しており、この表記を見返したとしても、発話のことを思い出すことに認知資源を振り向けられなかったのだろう。そのため、「買い物」と訳してしまったと推測できる。また、英語には「非常に」に相当する表記はなく、 通訳者役の受講生ができるだけ発話時間を引き延ばそうと「非常に」と付け加えて訳したと思われる。これは、当該箇所の SL を話す時間に比べて、TL を話す時間が短いと充分訳出できていないと判断されることを意識したのだろう。そこで、本文の内容に大きな影響を与えないと当該受講生が判断して、この表現を付け加えたと推測できる。

(9)

SL	TL	ノート・テーキング
The third tourist spot is Lake Yogo. While Shiga is well-known for Lake Biwa, Nagahama boasts another beautiful lake called Lake Yogo.	3 つ目にご紹介するのは余呉湖についてです。長浜の近くにあるとても美しい湖です。	

この SL では、琵琶湖と余呉湖の比較という「場」を設定し、場在外的視点から両者を比較している。場在外的視点の描写は場の参与者に焦点を当てているため、この視点を保持して統語的に正確に訳そうとすると、個々の参与者をそれぞれひとつのチャンクとして記憶しなくてはならない。そのため通訳をしている当該受講生には記憶が飽和してしまったのだろう。その証拠に TL では “While Shiga is well-known for Lake Biwa” が欠落している。メモを精査しても当該箇所の表記はなかった。さらに、“boasts” に対応する表記もなく、「長浜の近くにある」と訳されている。

次に、当該受講生が描いたメモを見てみると、 “The third tourist spot is Lake Yogo”に対応して「よご湖」とメモしていて、“Nagahama boasts another beautiful lake called Lake Yogo”の箇所は、「よごステ」と表記している。ここから推測されるのは、当該受講生の記憶が飽和したために、 “boasts” に注視資源を向けることができず、当該箇所を聞き逃してしまい表記することができなかったのだろう。そこで、「近くにある」と

いう表現を挿入して、「長浜の近くにある」と文を再構成したと考えられる。さらに、ここでも、TL の生成にかかる時間を少しでも延ばすために「とても」と SL にはない表現を付加したようであるが、適切さはおろか、正確さも担保できていない。

このように、文法群の受講生スピーチの通訳は、SL の「場外在的視点」のまま訳そうとすると、場の参与者に焦点を当てて記憶しようとするために記憶が飽和してしまい、認知資源を後続する情報に向けることができず、充分に訳出できていないことが分かった.

また、文法群は SL の発話時間と TL の訳出時間のバランスを取るために、SL では述べられておらず、文法的にも要請されていない表現が付け加えられている。

5.2 語用論群の分析

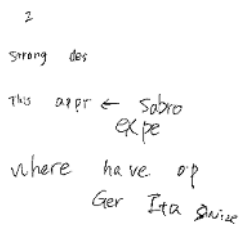
受講生スピーチの語用論群では、状況把握をする際の視点の置き方を意識させて通訳させるようにした。

（10）

SL	TL	ノート・テーキング
My passion for matcha blossomed around six years ago when I became involved in a tea ceremony during my high school years.	抹茶に興味を持ったのは 6 年前で、茶道部に入部しました。	

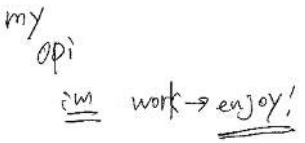
SL は、抹茶に興味を抱いた高校時代の原発言者を場として場在外的視点で描写している。その場を構成する参与者として、「芽生える」、「抹茶」が意識に上がったと考えられる。メモを見ても、それぞれに該当する “flower” , “green” と書かれている。ところが TL を観察すると、通訳者役の受講生は、場に自らを埋没させ、場内在的視点に置き換えて描写して TL で訳出している。そのため、複数の参与者から構成される場をひとつのチャンクとして捉えることで、記憶の負担を軽減させて過去の経験を想起するかのように安定的に訳すことができたのであろう。当該受講生が “I” を主語としつつも言語化せず、SL の “passion” を「興味を持った」と述語で訳出できたのもこの「場内在的視点」が働いているからと説明することができる。

（11）

SL	TL	ノート・テーキング
This aspiration stems from my experiences while studying abroad, where I had the opportunity to visit several countries such as Germany, Italy, and Switzerland.	この職業に就きたいと思った理由は、留学経験を得たことで得ました。例えば、イタリアやドイツ、スイスなどに行ったからです。	

SL は、留学中に旅行業に就きたいと思った原発言者を場として場在外的視点で描写している。その場を構成する参与者として、「憧れ」、「留学」、「経験」の 3 つが意識に上がったと考えられる。メモを見ると、それぞれに該当する “appr”、 “sabro”、“ expe”と表記されている。そして通訳者役の受講生は、TL では場に自らを埋没させ、場内在的視点に置き換えて描写し、複数の参与者から構成される場をひとつのチャンクとして捉えたのだろう。そうすることで、記憶の負担を軽減させて情報を欠落させることなく、過去の体験を述べるかのように訳出することができたのであろう。“I” を主語としつつも言語化せず、 “This aspiration stems from”を「この職業に就きたいと思った理由」のように SL にはない「思った」を TL で付加して訳しているのも、この「場内在的視点」が働いているからと説明することができる。

12）

SL	TL	ノート・テーキング
In my opinion, the most important aspect of work is doing something that you genuinely enjoy.	私の意見として、働いているときには楽しむことが一番だと思います。	

SL は、原発言者の就業意識に対する考え方を場として場在外的視点で描写している。通訳者の中に場が形成される。その場を構成する参与者として、「働く」、「楽しむ」、「重要」の 3 つが意識に上がったと考えられる。メモを見るとそれぞれに該当する “work”、“enjoy”、“im”と表記されている。そして通訳者役の受講生は、TL では場に自らを埋没させ、場内在的視点に置き換えて描写し、複数の参与者から構成される場をひとつのチャンクとして捉えたのだろう。通訳者の視点は場の中に置き、あたかも自分自身の主張を述べるかのように表現することができるのであろう。さらに、複数の参与者から構成される場をひとつのチャンクとして捉えることで記憶の負荷を軽減し、安定的に訳出している。また、SL にはない「思います」を TL で付加できたのも、

この場内在的視点で主張として述べているからと説明することができる。

両群の訳出を比較すると、文法群では場外在的視点で訳すると参与者ひとつひとつに意識を向けてしまうために記憶が飽和してしまい、正確さも適切さも担保されないながらも、SL の発話時間と TL の訳出にかける時間のバランスを取るために情報を付加していることが明らかとなった。一方、語用論群は、いずれの場合も通訳をしている受講生は、複数の参与者から構成される場をひとつのチャンクとして捉えることで、記憶の負荷を軽減していると考えられる。そのため、後続する情報の解釈に認知資源を向けることができるため、情報の漏れはまだあるものの、記憶が飽和することがなく通訳することがきていた。また、SL を手掛かりに「興味を持った」と言い換えを行い、「思った」、「思います」など SL では述べられていない経験や主張を意味する情報を付加することができたのも、場外在的視点で述べられている SL を場内在的視点で理解して TL で訳出しているからと説明することができよう。このように、英→日逐次通訳については、語用論群の学生の訳出例からもわかるとおり、場外在的視点から場内在的視点へと置き換えて理解して訳出する方が、通訳者役の受講者の記憶の負担も軽減させることができ、ひいては安定的に通訳することが明らかとなった。

6. まとめ

本稿では、TILT の一環として英→日逐次通訳の訓練で訳出を促すために、視点と認知的な負荷について場の理論を導入して無生物主語文を対象に検証を進めた。最後に(4)のリサーチ・クエスチョンに答えることで、 まとめに代えよう。(a) 文法群では、場外在的視点からボトムアップ的に理解を積み重ねる方略が強化された可能性が高い。その結果、入力される単語やフレーズ、つまり最小限の意味的なかたまりをひとつの記憶するためのかたまりとして認知してしまうため、受講生の記憶が飽和してしまい、後続する情報に認知資源を向けられずに記憶が追いつかなくなり、訳出でつまずきやすい。一方、語用論群の訳出例を精査すると、通訳者役の受講生は、TL では場に自らを埋没させ、場内在的視点に置き換えて描写し、複数の参与者から構成される場をひとつのチャンクとして捉えることで、記憶の負荷を軽減して安定的に訳出している。このことからも、視点の変更と認知的な負荷は関係があると結論づけられよう。

一方、(b) については、語用論群の訳出例から、無生物主語文を安定的に通訳することができた要因として、場外在的視点から場内在的視点に置き換えて訳していたことが明らかとなった。このことから、無生物主語文の訳出を促すには、場と視点を意識させ、場外在的視点から場内在的視点へと変更して訳させることができるかどうかがカギとなると言えよう。とはいえ、この理論がどこまで汎用的に説明できるかはさらにデータを収集し、かつ、日→英の逐次通訳も参照しなくてはならない。

……..

【著者紹介】

南津佳広(MINAMITSU Yoshihiro) 大阪電気通信大学・准教授
専門は通訳研究。特に、認知語用論の観点から通訳研究を行っている。
金井啓子(KANAI Keiko) 近畿大学・教授
専門はジャーナリズム論。ロイターで 18 年間記者・エディター・翻訳社として英語および日本語で記事を執筆・翻訳してきた。
吉田国子(YOSHIDA Kuniko) 東京都市大学・教授
専門は英語教育。特に自己調整学習理論を中心に研究と実践を行っている。
春木茂宏(HARUKI Shigehiro) 近畿大学・准教授
専門は語用論。発話解釈の研究を行っている。

【参考文献】

池上嘉彦（2011）「日本語話者における<好まれる言い回し>としての<主観的把握>」『人工知能』26 巻 4 号 人工知能学会 pp317-322
井出祥子・藤井洋子監修・編（2020）『場とことばの諸相』（シリーズ 文化と言語使用 2）ひつじ書房
井出祥子・藤井洋子監修・編（2022）『場と言語・コミュニケーション』（シリーズ 文化と言語使用 3）ひつじ書房
内山浩道（2010）「日本人の自己中心的視点と翻訳・通訳について」
http://gmsweb.komazawa-u.ac.jp/wp-content/uploads/2012/07/rgm07-01.pdf
岡智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房
角田大作（2009）『世界の言語と日本語 改訂版—言語類型論から見た日本語』くろしお出版
金谷武洋（2019）『日本語と西欧語 主語の由来を探る』講談社
清水博（2014）『新装版　場の思想』東京大学出版
西光義弘（1999）「英語は無生物主語を本当に好むのか」数研出版 CHART NETWOK 1999 年 10 月 30 号、1-6.
Gallai, F. (2022) *Relevance Theory in Translation and Interpreting: A Cognitive-Pragmatic Approach*, New York and Oxon: Routledge.
Seleskovitch, D,.& Lederer, M. (1989) *A Systematic Approach to Teaching Interpretation*, Registry of Interpreters for the Deaf.
Setton, R. (1999) *Simultaneous Interpretation: A cognitive-pragmatic analysis*, Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

＊本研究は、科学研究費　基盤研究（C）23K00783 の助成を受けて行っている。

論文

『ドリトル先生航海記』新旧訳対照研究
―「しゃがむ」児童文学翻訳におけるコミュニケーション重視訳―

セランド修子
(東京女子大学特任准教授)

Abstract

In this paper, the new and old translations of Hugh Lofting's Voyage of Dr. Dolittle, respectively by Ibuse Masuji and Kawai Shōichirō are compared from the assumption that translation for children's literature is featured by a coined naming in this paper, "squatting translation." It means a translator squats to be at the same eye level of children. In other words, a translator makes the most effort in reproducing the effect, joy, and excitement that the child reader of the original language experiences from the story.

The article, in the beginning, reviews Peter Newmark's eight translation theory and explains that "communicative translation strategy" is closest in explaining the translation for children's literature in a sense that a reproduction of an effect is most emphasized.

The paper further lists up the specific examples of the effects by especially scrutinizing the visual effect of the original and enhanced effect in the translated version by adding an expression, especially by Ibuse. The paper also looks at the role language, coined by Satoshi Kinsui, as well as the time and equivalence relationship.

There also are a few paragraphs that refer to the circumstances of how the translation of the Dr. Dolittle series started through the effort of Momoko Ishii.

本稿は、ヒュー・ロフティング作「ドリトル先生」シリーズ全13作品の第2作『ドリトル先生航海記』の井伏鱒二による旧訳と河合祥一郎による新訳の対照研究である。本稿の構想は、昨年2022年10月1日に行われた英語圏児童文学会東日本支部、秋の例会における発表において、同旧訳『ドリトル先生「アフリカ行き」』 (1951年に『ドリトル先生アフリカゆき』に改題) と同新訳『ドリトル先生アフリカへ行く』を論じたことに端を発している。その際に手掛かりとしたのはNewmark (1988a; 1988b)、河原 (2018)の翻訳理論である。この翻訳理論は、起点テキスト (SL) と目標テキスト (TL) との距離の観点から翻訳方略を、1) 語対応訳 (語順も含めて完全にSLに沿う、SL検証過程で用いられる)、2) 直訳 (SLの精神のみを杓子定規に重視) (Newmark, 1988a)、3) 忠実訳 (TLの文法的制約の中で、文脈上の意味を忠実に再現)、4) 意味訳 (以下参照)、5) 翻案 (演劇や詩に用いられる最も自由な翻訳方法)、6) 意

訳 (SLの形式や流儀のない、書き換え)、7) 慣用語法に則した訳 (口語や慣用表現を重視)、8) コミュニケーション重視訳 (以下参照) の8つに分けている。このうち意味訳とコミュニケーション重視訳 (読者寄りで効果重視) が、Newmark自身、「(8つのうち) 翻訳理論に最も貢献している」(Zu & Dong, 2015) とした方法である。意味訳とは、作者寄りではあるが、忠実訳よりも柔軟性が許され、意味及び構文を重視する手法となる。児童文学の翻訳の場合、読者である子供の認知は、起点言語を意識せず目標言語の中で完結することから、作者寄りではなく読者寄りであることが求められる。また、翻訳者は、英語読者である児童が感じるだろう興奮と可笑しさ (「効果」) を、翻訳読者である日本の児童が感じられることを意識して訳している筈であるということからコミュニケーション重視の翻訳に近いという前提で発表を展開した。

その発表から考えを発展させる中で、筆者の裡でいつの間にか、井伏のような文豪や、河合のような一流のシェイクスピア翻訳学者が児童向けに訳した翻訳を、「しゃがむ(すなわち、子供の目線に立った) 翻訳」と名付けるようになった。その意味は、読み手が児童であることを意識し、その目線に立った翻訳、つまり、読者寄りが前提のコミュニケーション重視訳である。ここで、いや、書いた作者自身が元々しゃがんでいる、つまり、子供の目線の高さにいるのであって、それを訳す翻訳家が果たしてしゃがんでいるのだろうか、という議論にもなり得るのは承知している。ここで焦点を当てたいのは、Dr. Dolittleの起点言語が備えている展開の早さと「力」(Newmark, 1988) である。本稿では、「ドリトル先生」訳が、この「力」に注力している点と、その結果、意味訳との組み合わせという多くの翻訳スタイルではなく、限りなく、コミュニケーション重視の翻訳となっている、と考え、論じていく。また、児童文学における等価性や、新訳に見られる役割語、及び、意図的とも思われる旧訳の原文にない追加という翻訳方略にも焦点を当てて、対照研究を行いたい。

使用した版は、原本が、1922年Frederick Stokes Company版を踏襲している2019年 48Sea Wolf Press版 *The Voyages of Doctor Dolittle*、旧訳は2021年8月26日第26刷[i] (初版1960年9月20日) 岩波少年文庫版、井伏鱒二訳『ドリトル先生航海記』、新訳は2020年4月5日20版 (初版2011年7月15日) 角川つばさ文庫版、河合祥一郎訳『新訳 ドリトル先生航海記』である。[ii]

石井桃子の翻訳への役割

本論に移る前に、石井桃子が翻訳に果たした役割を記しておく。本論の対象としてドリトル先生シリーズ第一作の「アフリカ行き」ではなく、第二作の「航海記」を選んだ理由の説明ともなるからである。また、石井桃子が全ドリトル作品の下訳を行ったとの誤った認識が、Amazonのreviewを含むネット上で散見されるため、この機会に明記することには多少の意義があろう。

石井は、太平洋戦争勃発の三年ほど前に、米国の友人からStory of Dr. Dolittleを送られ、おもしろく思って井伏に伝えた。こうした事情からその後のドリトル先生全作品を石井が下訳したという説が浮上するのも無理ないことかもしれない。この誤った一部の認識を正すのは簡単で、現在の岩波少年文庫版『ドリトル先生アフリカゆき』の井伏自身のあとがき

と石井のエッセイを読む限り、下訳があったのは「アフリカゆき」のみで、それも井伏が『おいそがしくて、なかなか[翻訳を]やってくださ」らなかったのが理由であることは明らかである。また石井は、1998年のエッセイにおいても、「しかし、最初の巻だけをお手伝いした私から見ると、井伏さんは、あの本の翻訳ちゅう、かなりたのしまれたのであろうという気もしないではない」と明確に記している。(石井、1978、pp. 185-191) この説明の裏には、長きに渡って井伏の本来の小説執筆や文学評論のじゃまをしてしまったという気遣いが感じられる。

なお『ドリトル先生「アフリカ行き」』が、石井が家庭教師をしていた犬養道子の母、仲子の薦めで、昭和16年に信濃町の犬養邸内に設立された白林少年館から出版されたこと、設立にあたり石井が文芸春秋社の退職金を用いたと井伏が記していること (石井自身のエッセイでは、友人、恐らくは仲子が資金を出したような意味の言及がある (石井、2015、p.237))、その後2冊の出版を見ながらも戦局故に閉館し、現在の荻窪の「かつら文庫」へと変容を遂げたことは、本論とは無関係であるが、特筆すべきことと考える。

旧訳新訳の装丁と旧訳の新しさ

新旧訳を出している出版社の態度の差異だが、二社ともアフリカ人アジア人への描写に人種差別の要素がある懸念について説明をしており、その使用を決断した理由には共感が持てる。岩波は「古典的な文化遺産をまもり」「差別問題への理解を深める」一助とすると成人向けの説明を述べ、角川は原作者の意図を尊重することを『ロフティングさんは差別するつもりではなく、『人も動物も区別なく、みんななかよしでいるのが一番』とつたえたかったのだ」と子供向けの説明をしている。

岩波少年文庫版の装丁は、白林少年館による初版の色相であるオレンジ色を基調にし、ロフティング自身による原本の挿絵が用いられている。シリーズ第一作の『ドリトル先生アフリカゆき』末尾には、前述した通り、井伏のあとがきと石井桃子によるエッセイ及び各巻の紹介が付録として含まれている。そこには、文学史に資そうとする岩波の矜持と責任感が見え、一連のシリーズが児童よりも成人を意識したものであることを感じさせる。

一方、角川つばさ文庫は、ブルーやレンガ色が基調だった原本にはない、明るい緑が色相であり、小口を見開いた左上端には、ペン画の、登場人物ポリネシアやガブガブが小さく描かれて動画となる、いわゆる「パラパラ漫画」が施されている。新進の女性イラストレーターpattyによる挿絵は漫画調で、ドリトル先生を始めとする多くの登場人物の目は黒丸で描かれている。これはロフティングの原画を踏襲したものとも思われる一方、余談ではあるが、日曜学校で現在用いられる教材の中で、イエス・キリストほどの重要な人物像の目が類似の「黒丸」であることを考えた場合、現代の児童文学の挿絵の一つの傾向を示しているようにも思える。

また、角川つばさ文庫版には、目次前に登場人物の挿絵と短い説明、また、あらすじの説明が置かれている。二社のシリーズはいずれも、全てをそろえると一つの大きなボックスに入り、児童はゲームを手にしたような感覚を覚えるのではないかと思われる。

角川つばさ文庫の方はその漫画調の外観故か、ネットのレビューを見る限り、名作の改作(漫画化) と誤解する親もいるようだ。新訳が一字一句原文に忠実に訳した、シェイクスピア翻訳者による文学性の高いものであることは、装丁を見ると確かに俄かには信じられない。

では井伏訳は出版社の態度同様成人向けか、と言うとそうでもなく、現代の児童でもすらすらと読める訳である。村上春樹が言うところの「翻訳賞味期限」が極めて長い。一つには文語表現の使用がごく限られている、ということがあろう。それは全385頁の中でほんの15ほどの語数なのである：もうせん (9)、やぶにらみ (14)、愉快 (14)、なすった (20)、なにしろ (21)、あやまち (28)、めんくらって (31)、せがれ (35)、案じて (45)、失敬失敬 (46)、どこなりと (68)、みえぼう (71)、やきもき (83)、うさんくさそう (88)、よしんば (96、151)、かねがね (238) 等に限られている。いかに井伏の言語感覚が新しいものであったかが分かり、読み進めていても、自分が今読んでいるのが、新訳なのか旧訳なのか混乱するほどである。

「しゃがむ」等価論

コミュニケーション重視

先ず、コミュニケーション重視の翻訳の場合の前提である「効果」と「力」(Newmark, 1988) について述べていく。当該作品における効果は、次々と激しく変わっていく、視覚効果の高いストーリー展開を通した、弛まない興奮と可笑しさであり、コミュニケーション重視の翻訳とはそれを目標言語に置きかえる作業となる。ここでは、A) 語り手であるスタビンズ少年とドリトル先生の、にわか雨 (英国らしい舞台設定) の中の初めての邂逅、B) 猛る牛を意のままに操る先生の闘牛シーン、C) 洞穴に閉じ込められたインディアンの開放につながったカブトムシ、ジャビズリの動きを取り上げる。

A) 邂逅場面

(1) I hadn’t gone very far when my head bumped into something soft and I sat down suddenly on the pavement. (2) I looked up to see whom I had run into. (3) And there in front of me, (4) sitting on the wet pavement like myself, was a little round man with a very kind face.

旧訳：

ところが、(1) かけ出してからすぐに、私はやわらかいものに、どんと頭をうちつけました。私は道にしりもちをつきました。(2) 私は、だれにつきあたったのだろうと顔をあげました。(3) すると、私の目の前に、しんせつそうな顔の、ふとった小柄な人が、これも私と同じように、(5) ぬれた道の上に、(4) しりもちをついているのです。(p. 27)

新訳：

(1) あまり進まぬうちに、頭がやわらかいものにドスンとぶつかり、ぼくは歩道にぺたんと

しりもちをつきました。(2) なににぶつかったのだろうと顔をあげてみると、(3) 目のまえに、とてもやさしそうな顔をした、背の低い、太ったおじさんが、ぼくと同じように (4) しりもちをついていました。(pp. 31-32)

(1)～ (4) 新旧とも順送りであるが、以後も概ねそうであるのは、児童文学の性質とも言える。一人称は、「私」より「ぼく」の方が現代の児童には親しみやすかろう。旧訳は「私は」が多すぎ、5つのうち、4つは省略可能である。旧訳だけにある (5)「ぬれた道の上に」は原文にはなく、どしゃぶりの雨の中での邂逅という視覚効果を高める目的で、翻訳家の独断で井伏が追加したものかもしれない。

上記のような、原文にはない視覚的効果目的の付け足しは、他にもある。それが闘牛シーンである。この翻訳は、起点言語にはなかった力をさらに加えるという効果を有する。

B) 闘牛場面

But (1) presently the Doctor was seen to (2) break loose from the mob of animals that surrounded him. Then catching each of them by the horns, one after another, he would give their heads a sudden twist and throw them down flat on the sand. (3) The great fellows acted their parts extremely well.

旧訳：
しかし、(1) まもなくドリトル先生は、とりかこむ乱暴な動物のかこみを (2) 破って、ひとり仁王立ちになりました。そして、一ぴきずつ牛の角をつかまえ、つぎからつぎに頭をひねって、またたく間に全部の牛を地面にころがしました。(3) 大きな牛たちは、じぶんの役まわりを、まったくうまく演じました。(p. 210)

新訳：
ところが (1) すぐに、先生は、自分をとりかこんでいた牛のむれから (2) するりとぬけだしました。そして、次々と牛の角をつかむと、首をぐいとひねって、砂の上にすべての牛を腹ばいにさせました。(3) りっぱな牛たちは、上手な演技をしてみせました。

(1) presentlyがどれだけの時間の経過を表すかという意味では、「すぐに」の方が近い。(2) break loseの意味としては、新訳の「するりと」が合っており、旧訳の「破る」という意味はbreakという単語にも関わらず、ない。(例えばthrow awayを「投げ捨てる」と訳す例があるが、これは、単に「捨てる」が正しいのである。)しかし、旧訳では、その後の「ひとり仁王立ちになる」という表現と併せて、視覚効果が増している。(3) のgreat fellowは、この章の表題が“Great Bullfight”であり、旧訳は「大闘牛」、新訳は「すばらしい闘牛」。その差は微妙である。

C) カブトムシのジャビズリー

B) は、翻訳家が視覚効果を増し加えている例を含んでいるが、原文に極めて興味深い視覚効果がある場面と、それに至るまでのストーリー展開を含めた翻訳の検証をしたい。場面は、丘の下にできた洞穴に大きな岩によって閉じ込められたインディアンを救出するべく、その箇所を特定する目的で、小さな巣穴に戻ろうとするカブトムシの習癖が用いられるシーンである。状況の緊急性にも関わらず、のろのろとうごく虫へのいらだちと、それに伴って起こる仲間同士の口喧嘩とがあり、大いに笑いを誘う箇所だ。

Do you know how long it takes a beetle (1) to walk round a mountain? Well, I assure you it takes (2) an unbelievably long time. (pp. 155-156)

旧訳：

カブトムシが (1) 山をまわるには、どんなに長く時間がかかるか、みなさん御存じですか。それはもう、(2) お話にならないほど長い長い時間がかかります。(p. 272)

新訳：

カブトムシが (1) 山のまわりを歩くのにどれくらいかかるか知っていますか？そりゃあもう (2) 信じられないくらい長い時間がかかるんです。(p. 286)

(1) (2) いずれの訳も特に有意な違いはなく、新旧訳をざっと見る限りはほとんどがそうである。しかし旧訳の「山をまわる」の方が、英語を表す日本語としては近い。また、旧訳の「お話にならないほど」は、やや意訳であるが可笑しさが伝わる。

“Well,” said Bumpo to Polynesia, “what do you think of the beetle’s sense now? You see he (2) *doesn’t* know enough to go home.”

“Oh, be still, you (1) Hottentot!” (3) snapped Polynesia. (4) (156)

旧訳：

「どうだね。」と、バンポが、ポリネシアにいいました。「カブトムシの知恵を、どう思う (4) かね？カブトムシは、きっと帰り道をよく知らないん (4) だぜ。」

「まあ、この (1) ホッテントット人たら、静かにしてもらいたい (4) ですね。」と、ポリネシアは、(3) きびしくきめつけました。(p. 273)

新訳：

「ほら」とバンポが、ポリネシアに言いました。「こうなると、カブトムシの判断力をどう思い (4) ますか？こいつは家に帰ることも (2) **できない**の (4) ですよ。」

「ちぇ、(4) おだまり、この (1) ホッテントットト (4) め。」ポリネシアが (3) ぴしゃりと言いました。(p. 287)

(1) 「ホッテントット」は、差別用語だが、いずれの出版社も、あとがきで修正無しの使用を説明している例だ。ここでは登場人物の中でも、最も語彙が豊かなオウムのポリネシアがそれを用いていることが、面白さを際立たせている。(2) は、原文の対話部分でごくたまに、斜体で表されている部分だが、英語では口語会話のトーンが聞こえてくるような効果を持つ一方、日本語には同じ効果はない。その意味では、わざわざ同じ個所を太字表記し、できるだけ原文に忠実にしようとした河合のこだわりが、むしろ良く表れている好例である。(3) について旧訳は、snapの意味を正確に訳していない。原文に存在しない (4) の接尾辞についての新旧差違いの興味深い点は、新旧訳の丁寧語が動物と人間との間で逆転している点である。新訳においては、実は王子であるはずのバンポがオウムに対して極めて丁重な言葉遣いをしているのに対し、オウムは容赦ない。ポリネシアを含め登場人物は皆、ドリトル先生に対しては、等しく敬語を使うが、スタビンズ少年にはいわゆるため口である。人間と動物との間の丁寧語の逆転は、この後の別段落で触れる。

こういった仲間同士の口げんかの後、突然ジャビズリーが地中に姿を消すというストーリー展開において、原文では目に見えるような直喩が用いられている。

But presently, when the Jabizri was no more than ten feet above our heads, we all cried out together. For, even while we watched him, (2) he had disappeared into the face of the rock (1) like a raindrop soaking into sand. (p. 156)

旧訳：
まもなく、ジャビズリーが私たちの頭上、三メートルぐらいのところまでのぼったとき、みんな一度にさけび声をあげました。私たちが注意して見ていたのに、(1) まるで雨だれが砂にしみこむように、(2) 岩の表から姿を消したのです。(p. 274)

新訳：
でもやがて、ジャビズリがぼくたちの頭上三メートルぐらいのところまで来たとき、ぼくたちは声を合わせてさけんでしまいました。だって、ぼくたちが見ている目の前で、(1) まるで雨が砂に吸いこまれるみたいに、(2) 岩のなかに消えてしまったからです。(p. 289)

(1) raindropを「雨だれ」とした、旧訳の方がより精緻で、「しみこむ」と能動動詞になっている。(2) この主語は、新旧訳のいずれもジャズビリだが、いずれも明確な視覚効果が出ている

現代社会における動物との距離の近さ
等価がもしも、登場人物同士の距離感という価値をも含むものなのであれば、新訳はその距離を縮めることでより現代の児童の目線に立った「しゃがむ」翻訳となっている。
以下は、ポリネシアとスタビンズ少年とが初めて直接互いに口をきき合う場面だが、動物と

人間の距離が、新訳では明らかに縮まっている。

“Good morning. (1) How early you are!”
I turned around, and there, sitting on the top of (4) a privet hedge, was the gray parrot, Polynesia.
“Good morning,” I said. “I suppose I am rather early. Is the Doctor still in bed?”
“(3) Oh no,” said Polynesia. (p.27)

旧訳：
「おはよう。たいへん、早いん (1) ですね。」
あたりを見まわすと、(4) 玉ツバキのいけがきの上に、あのオウムのポリネシアがとまっているのです。
「おはよう。」と私はいいました。「すこし早すぎた (2) かしら。先生は、まだおやすみ (1) ですか。」
「(3) いいえ、いいえ。」とポリネシアはいいました。(p. 58)

新訳：
「おはよう。ずいぶん早起き (1) だね！」
見ると、(4) イボタノキのかきねの上に、あの灰色のオウム、ポリネシアがとまっていました。
「おはよう。ぼく、早すぎたね。先生は、まだお休み (1) かな？」
「(3) なに言ってんの」と、ポリネシアは言いました。(p. 63)

(1) 丁寧語の変化は、そのまま戦後以降の日本語の変化を表すものかもしれないが、オウムと少年の近さの違いは、特にこの接尾辞によって鮮明になっている。(2) は一種の教養を表すいわゆる役割語 (金水、2003) で、女性語の使用で社会的地位が表されていた戦中・戦後の流行が見えるが、作中用いられる頻度は極めて少なく、(完全な精査ではないが) この箇所のみであるようだ。(3) について、新訳は、やや横柄にも聞こえ、ポリネシアの誇りの高さが計り知れる訳し方になりっており、後述する役割語を示すことで、キャラクタの性格に色彩を与えている。(4) プリベットは日本でも最も生垣に適した植物として挙げられているが、昭和の当時は、椿 (玉ツバキは椿の美称) の方が垣根として一般的だったかもしれず、受容の仕方の一例となる可能性がある。

作品中、スタビンズ少年も絶えず動物とともにいるが、動物と対話をしているのは、もっぱら先生である。唯一、スタビンズ少年が一人で動物と対話をするのが船の難破後、ゴクラクチョウが助けに来た時のみである。

“(1) Are you awake?” said (2) a high silvery vice at my elbow.

I sprang up (3) as though some one had stuck a pin in me. (omit)
"Oh, Miranda, you dear old ting," said I. (p. 144)

旧訳：
「起きて (1) いますか？」
ふいに、私のひじのところで、(2) ちりんという銀のような声がしました。
とたんに私は (3) ピンをさされたようにとびあがりました。(中略)
「(4) おお、ミランダ、なつかしいよ。」と、私はいいました。(pp. 251-252)

新訳：
「起きて (1) いらっしゃるの？」
ひじのところで、銀の (2) 鈴を鳴らすような声がしました。
(3) だれかにピンでもつきささされたかのように、ぼくは飛びあがりました。(中略)
「(4) ああ、ミランダ、なつかしいなあ」と、(5) ぼく。(p. 264)

(1) 新訳におけるゴクラクチョウは、その繊細でひたすら美しい姿に見合った上品さを備えている。「いらっしゃる」「でしたわ」「およこしになったの」等の山手ことばによる役割語が明確に見られる。動物たちの話す役割語は、次の段落で述べる。(2) 原文では暗喩だが、新旧いずれも「銀の『ような』」「鈴を鳴らす『ような』」と直喩である。(3) 原文、新旧訳とも、直喩だが、旧訳の方がその効果が高い。また、(4) も、「なつかしいなあ」より「なつかしいよ」の方が、一晩中一人で海に漂っていた後の感激が伝わるうえ、その後の新訳の体言止めには、緊急事態の緊張が感じられない。

新訳の役割語
前段落のゴクラクチョウの対話でも見られる通り、新訳は、特に「いらっしゃる」や「なあ」など、人物によって異なる丁寧語や接尾辞が使われている。これがさらに役割語に発展した明確な例が、シリーズ第一作の「アフリカ行き」で船に紛れ込み、上陸の直前の難破でおぼれそうになる白ネズミである。版は、The Story of Dr. Dolittle 1920の旧訳岩波少年文庫1951年版と新訳『ドリトル先生アフリカへ行く』(角川つばさ文庫, 2011)である。

I wanted to see what Africa was like—... When the ship sank I was terribly frightened—because I cannot swim far. I swam as long as I could, but I soon got all exhausted and thought I was going to (1) sink.

旧訳：
アフリカが見たかったのです。(中略) 船が沈んだとき、ぼく、遠くまで泳げないものだから、とてもこわかった。でも、泳げるだけは、泳ぎました。それでも、すぐへとへとになっ

て、いよいよ (1) おぼれるのだと思いました。(p. 48)

新訳：
アフリカってどんなところか見たかったんでちゅ。(中略)船がしずんだときは、ちゅごくこわかった。泳げるだけ泳いだけど、すぐちゅかれて、(1) しずんじゃうような気がちたんだ。(p. 51)

新訳は、白ネズミの愛らしさが伝わってくると同時に、メディアで活躍する一部のタレントに見られる、固有の接尾辞による個性と同等のものが見られる。(1) なお、sinkについては、旧訳の「おぼれる」の方がインパクトは高いが、ここでも新訳は忠実な訳となっている。

同じく「アフリカ行き」では、農耕馬が先生に眼鏡の処方を依頼に来る場面がある。ここでも岡山弁や博多弁を混ぜた、存在しない田舎言葉という役割語が用いられている。

“I would like a pair like yours,” said the horse—“only green. They’ll keep the sun out of my eyes while I’m plowing the Fifty-Acre Field.” (omit)
When will my glasses be ready? (ページ番号不明)

旧訳：
「先生のようなめがねに、お願いしたいもので。」と馬は言いました。「でも、色はみどりのがよろしゅうございます。五十町畑を耕すときも、日光が目にしみこまないようにいたしたいんで。」(p.18)
(中略)先生、私のめがねは、いつできますか？」(p. 20)

新訳：
「先生のメガネみたいなのがええのう」と馬は言いました。「ただ、サングラスにしてくれ。そしたら、二十ヘクタールの畑をたがやしちょるあいだも、日光が目に入らんですむ。」(p. 22)
(中略)わしのメガネは、いつできるとね？」(p. 23)

等価と時空
ここで時間の問題に触れてみたい。翻訳文を読む場合、三つのas of [～現在]という時を相手にしなければならない。すなわち、1) 原典が書かれた時、2) 翻訳された時、3)翻訳が読まれる時、である。『ドリトル先生航海記』にこれを当てはめると、1) は1922年の執筆時、2) が井伏の訳した1960年と河合が訳した2020年である。3) は、旧訳は実に60年前から現在まで、新訳は、ここ3年間ということになる。「航海記」は、語り手のスタビンズ少年が老年となって、若いころを振り返って書いている前提で、さらに時間が遡る。そして、等価は、

翻訳された時と読まれる時が近い方が達成される確率が高い。

> All that I have written so far about Doctor Dolittle (1) I heard long after it happened (2) from those who had known him – indeed a great deal of it took place (3) before I was born. But I now come to set down (4) that part of the great man's life which I myself saw and (5) took part in.

旧訳：

もうせん私の書いた『ドリトル先生アフリカゆき』の物語は、(2) ずっと前に先生を知っていた人たちから、そのころのいろいろなできごとを、(1) あとになって、私がきいて書いたお話です。むろん、そのお話の大部分は、(3) 私の生まれるより前にあったことがらです。しかし私はこんど、(4) このえらい先生の一生について、直接じぶんで見たことや、また、(5) じぶんにも関係のある話を書くことになりました。

新訳：

以前私が書いた『ドリトル先生アフリカへ行く』は、(2) 先生のことをご存知だった人たちに (1) お話をうかがって書いたもので、実際、お話の大半は、(3) 私が生まれるよりずっと前に起こったことでした。しかし、これから書くお話では、(4) 私はあの大先生のかつやくを目の当たりにしたのみならず、(5) 私自身このお話に登場するのです。

(1)の部分は、本来I heardの後に続く従属節が倒置されている。I have written so farとは、第1作のThe Story of Doctor Dolittleのことである。第1作が第2作の語り手であるトミー・スタビンズ少年によって、様々な伝聞を組み合わせて (2) 書かれたことは、ここで初めて明らかになっている。語り手は、老人になってから当時を振り返り、オウムのポリネシアの偉大な記憶力を頼りに、2作目を書くというお膳立てである。舞台の時代は2作目の時代から、スタビンズ少年が生まれる前 (3)、つまり、さらに10年前の1作目、それを年老いた70年後なりの現在から振り返っている。set down (4) とは、settled to write downと同義である。(5) のtaking part inは「自らが関連した」でも「当事者」でもあり得る。

pushmi-pullyu

最後に、想像上の動物である心優しい双頭のカモシカ pushmi-pullyu の新旧訳について触れたい。巨大カタツムリ同様、ドリトル先生シリーズを代表する。井伏は石井桃子から口頭で、この想像上の動物についての描写を聞き「オシツオサレツ」という、後に名訳と言われ続けた訳出をした。現代訳において、河合は「me と you という言葉を入れ (河合、筆者への 2022 年 8 月 e メール)」て、起点言語により忠実にするという目的で、「ボクコチキミアチ」としている。

『ドリトル先生航海記』は、井伏訳の出版後、13 年間で 6 種類の翻訳が出され、pushmi-pullyu

の訳も 4 種類ある。(註 ii を参照。) 名前が想像させる動力、つまり、中心に向かって押したり引いたりしているのか、外に向かって引っ張られる状態なのかが、訳によって逆である点が興味深い。代表的な固有名詞でも、翻訳者による解釈が正反対となる好例である。

結論

以上『ドリトル先生航海記』の新旧訳を、各翻訳者がどのように児童の目線まで下がって訳しているかを考察する「しゃがむ翻訳」という視点から比較して検証した。それは言い換えれば、Newmark がコミュニケーション重視の方略を述べる上で、重要要素とした起点言語の意味重視の視点と、効果と力を重視する視点である。全般的に、井伏の旧訳は、原文の視覚効果をさらに高める追加をところどころ施す一方、河合の新訳は、原語の効果の程度のみならず、その意味を忠実に再現する傾向がみられた。しかし新旧それぞれに、原書の視覚効果や歴史の中の時間の位置を等価に再現している様子が確認できた。また、原書におけるスピード感ある展開が、目標言語の中で維持、実現されている様子が確認できた。さらに、挿絵や装丁にも短く触れ、現代版がより現代の児童の目線に立ったものとして、生まれ変わっている事実も説明した。

意味重視の視点から検証すると、原語の英語の意味に新旧のどちらがより忠実かという作業が伴うわけだが、今後の研究課題として、いわゆる文豪による児童翻訳について、より広い視点から検証して傾向分析へとつなげる試みをしていきたい。

……

【著者紹介】
セランド修子 (SELLAND Naoko)
東京女子大学特任准教授。会議通訳者。

…….

【参考文献】

石井桃子 (1978)「『ドリトル先生物語』について」『ドリトル先生アフリカゆき』岩波少年文庫
石井桃子 (2015)「井伏さんとドリトル先生」『石井桃子コレクションⅤ エッセイ集』岩波書店
河原清志 (2017)『等価論再考―翻訳の言語・社会・思想―』晃洋書房
金水敏 (2003)『バーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店
Newmark, P. (March, 1988a). *Pragmatic translation and literalism.* Guardian Weekly
Newmark, P. (1988b). *A textbook of translation.* London: Prentice Hall
Zu, M & Dong, Y. (2015). *A Brief Analysis of Communicative Translation and Semantic Translation.* Joint International Social Science, Education, Language, Management and Business Conference

……

【註】

[i] 60 年以上の隔たりがある旧訳の刷間の相違については、第 1 刷と最新刷との粗い比較を行った。言い回しの違いは、「はじめのことば」に最も多く、本編自体については刷間の有意な相違はない。

[ii] 以下は、著作権が切れる以前の翻訳の一覧と pushmi-pullyu の訳である。

邦題		翻訳者	出版社	年	版、刷	ページ
『ドリトル先生航海記』	オシツオサレツ	大石真	文研出版	昭和45	初版	p.59
『ドリトル先生航海記』	プシュミプルユ	古友雅男	講談社	昭和42	初版	p.53
『ドリトル先生航海記』	オシアイ=ヘシアイ	谷真介（編著）	偕成社	1973	初版	p.38
『ドリトル先生航海記』	オセヤイヒケヤイ	虎岩正純	偕成社	昭和42	不明	p.60
『ドリトル先生航海記』	オシツオサレツ	前田三恵子（文）	偕成社	昭和43	不明	p.34
『ドリトル先生航海記』	言及なし	伊達常雄（文）	集英社	昭和48	初版	N/A

翻訳

文学作品はいかに国境を越えるのか（あるいは越えないのか）？
世界文学への社会学的アプローチ[1]

ジゼル・サピロ
（秋草俊一郎訳）

Abstract
This paper analyzes the factors that trigger or hinder the circulation of literary works beyond their geographic and cultural borders, i.e. participating in the mechanisms of the production of World Literature. For the sake of analysis, these factors can be classified into four categories: political (or more broadly ideological), economic, cultural and social. Being embodied by institutions and by individual agents, these factors can support or contradict one another, thus causing tensions and struggles. This paper ends with reflections on the two opposite tendencies that characterize the transnational literary field: isomorphism and the differentiation logics.

仮に、世界文学を国境を越えて流通する文学作品を指すとするのなら（ダムロッシュ）、そうした作品がいかに流通し、どのような障壁にぶつかるのかを問うてみなくてはならない（Apter）。障壁は言語ばかりではない。テキストの内在的な価値にかかわらず、その流通を誘発する社会的要因があるように、無数の社会的障壁もある。それゆえに社会学的アプローチが必要になる。社会学的アプローチによってこうした要因や「世界文学」の生産のメカニズム、そしてその特有のヒエラルキーを特定するのである（カザノヴァ）。

ピエール・ブルデューは「アイデアの流通の社会的条件」についての重要な論文で、このプロセス内の個人やグループが立案した戦略を考究するための方法を概説した（Bourdieu “Social Conditions”）。このアプローチは、アイデアは超自然的感化現象によっておのずと広まるのではなく（タルド）、本、新聞、雑誌、インターネットのような物理的手段や公的・私的な場における口頭による拡散を介して広まるという仮定をもとにしている。その結果、国際交流を研究する社会学はエージェントに注目し

[1] 本稿は以下の論文の翻訳である。翻訳に際して著者の許可をえた。Gisèle Sapiro, “How Do Literary Works Cross Borders (or Not)?: A Sociological Approach to World Literature,” *Journal of World Literature* 1 (2016) 81-96.

てきた。つまりは流通に関わる個々人や、グループ、機関などである。文学作品の場合なら著者、出版社、国の政策の代弁者、文芸エージェント、翻訳家、批評家などになる（Heilbron and Sapiro）。さまざまなソース（ユネスコのインデックス・トランスラチオヌム、国ごとの書誌情報、書店のデータベース、出版者のカタログ、国策によって作成されたリスト）から構築された多言語における翻訳作品のデータベースが、フローの統計のためのデータを提供してきた。言語（Heilbron）、国（Popa）、都市（Sapiro “Globalization”）にまたがる出版翻訳のフローに、世界システムの分析フレームを当てはめることで、中心と周辺の往来の不均衡さを記述してきた。このようなデータベースはなにが訳されるのか、誰によって訳されるのかについて考えるうえで重要な情報源になっている（Popa; Sapiro *Translatio*; Sapiro “Symbolic Capital”）。そういった量的データが示すパターンや規則性は、特定の文脈において象徴財の流通を妨害／誘発する要因を理解する一助になる。それだけでなく、仲介者の動機について疑問を喚起する。生まれた仮説は、伝記（自伝）や回想記、インタビュー、メディアにおける批評状況、イベント（ブックフェアやブックフェスティバル、文学賞）のような質的データに照らして確認したり修正したりしてもいい。

こうした要因は四つのカテゴリーに分類できる。政治的、経済的、文化的、社会的要因である。通例、文学研究者と翻訳研究者は文化的要因とテキストに注目する。文化の伝播を研究する歴史家は、政治的な要因や関係者（アクター）が果たす役割には関心を寄せてきたが、経済的な側面については軽視していた。また出版史の研究者は最近まで翻訳についてはあまり関心を払ってこなかった。社会的要因は主に、ポストコロニアルやジェンダー・スタディーズの分野や、文化社会学者によって指摘されてきた。たいていの場合、これら四つの要因は絡み合っているが、文脈によってはひとつが突出し、ほかの要因がかすんでしまうこともある。ここでは文学作品の流通をめぐる社会的条件の分析フレームワークを提示するために、それぞれの例を個別にあげてみたい。そのまとめとして、社会－歴史的ダイナミクスについて理論的な問題を議論してみたい。文化の伝播は部分的には異質同型の観点から説明することができる。その観点は模倣や制約、あるいはネオ制度主義理論（DiMaggio and Powell）が分析する集団規範のいずれでもいいが、こうした伝播の説明にはまた、差異化の理論もとりいれなくてはならない。これら二つのプロセスを合わせることで、フランコ・モレッティによる二種の革命的なモデル（波と樹）のための解釈フレームがえられる。

政治的要因

政治や、より広範なイデオロギーは、文学作品の流通を誘発、妨害する要因になりうる。翻訳は政治やイデオロギーの標的にもなれば、あるドクトリンや世界観を広める手段にもなる。政党や政治団体はマルクス・エンゲルスの著作に類するものの国際的な流通や、社会主義リアリズムの世界的正典（キャノン）の構築に寄与してきた。インデック

ス・トランスラチオヌムによれば、一九五五年から八〇年のあいだ、レーニンはもっとも訳された著者だった（ヴェヌティ 323）。

しかし、普及戦略は法的手段によって対抗処置がとられることもある。著作権法、出版者に対する法的規制、印刷物の流通に対する政治的統制（これは権威主義 vs リベラリズムがどちらに振れるかによって変わる）を通じて、国家は法による線引きを課してきた。外国の出版物はしばしば特別扱いされ、自国語の出版物にくらべて厳しくコントロールされる。たとえば、一九五六年にナボコフの『ロリータ』英語原典がパリのオリンピアプレスから刊行されると内務省によって発禁になったが、ガリマール社が三年後にフランス語訳を刊行したさいにはなんのお咎めも受けなかった。これは、ガリマールの威信に比してオリンピアプレスの評判がきな臭かったというだけでは説明がつかない。アルジェリア戦争中、出版に対する国家統制が強化されていた。その状況では、これは自由主義革命の結果というわけではなく、外国語の出版物への疑念の高まりがあらわれたものだった。これは、翻訳が検閲を回避する手段にもなるかもしれないということを意味する。しかし、そもそも原典をフランスで最初に出版しようとしたということ自体が、著者が自国——フランスよりもリベラルではないアメリカ合衆国——で直面せざるをえなかった規制を物語るものでもある。ウィリアム・バロウズは『裸のランチ』で同様の規制につきあたった。一九五九年にパリのオリンピアプレスから英語版原典が最初に刊行されたのち、ガリマール社よりフランス語訳が刊行されたが、今度は検閲で難航し、一九六二年にグローヴプレスから別の版が再出版されるも、ボストンとロサンゼルスでは猥褻との理由で発禁処分になり、それはマサチューセッツ州最高裁判所が一九六六年に判決を覆すまでつづいた。

地下出版（ロシア語で「サミズダート」と言う）よりも危険は少なく、より広範な読者層を確保できるということもあって、原典・翻訳問わず国外出版は権威主義国家で数々の反体制作家が採用してきた戦略である。このことは一九五七年にイタリアのフェルトリネッリ社から最初に刊行されたパステルナークの『ドクトル・ジバゴ』の場合や、著者がパリに移住する前からフランス語訳で刊行されたミラン・クンデラの小説の場合を思いだしてみればいい（Popa）。経済が政治に牛耳られていたり、文化的生産物を差配する機関や知的職業の団体が国営だったりする国家では、ファシズム国家や共産主義国家同様、象徴財の生産と流通は高度に政治化されている（Sapiro “Literary Field”; ドイツ民主共和国における児童書の翻訳については Thomson-Wohlgemuth を参照、ファシズム政権下のイタリアにおける翻訳については Rundle を参照のこと）。ドイツ占領下のフランスでは、第三帝国はフランス語からドイツ語への翻訳を禁じた。例外は熱心なコラボラトゥールの一握りの作家だけだった。同時期にドイツ占領軍は可能なかぎり多くのドイツの作家を翻訳するようフランスの出版社に命じた。これはフランスの文化的覇権を切り崩すという政策の一環だった。たとえば、ガリマール社はエルンスト・ユンガーの著作を数冊刊行した（Loiseaux 110–

111）。

実際、翻訳は政治を超えて、国家間の力関係の問題である。国民国家にとって、自国の文学が翻訳のかたちで輸出されることは、国際的に認知されているというある種のしるしになる。この輸出に助成金を支出する国が多い理由である。しかし、翻訳を援助する国の政策は、より広い国家戦略に組みこまれている場合もある。たとえばイスラエルでは、ヘブライ文学翻訳研究所に公的資金が投入された表向きの理由のひとつが、パレスチナ占領で世界中から非難された国のイメージの改善に役立つからというものだった（研究所所長へのインタビュー、二〇〇一年一〇月三一日）。他方、外国語文献の自国語への翻訳に対する国の支援は、アラブ各国の例が示すように、教育や科学を一定のレベルにまで引き上げたり、国際的な水準に「追いつく」ためには認められうる（Jacquemond）。これらのケースでは、政治的・文化的要因は絡み合っている。国内の出版産業を支援するという経済的要因も、今日のフランスのように、翻訳を支援するための国家の介入を正当化する口実として用いられるかもしれない。しかし、フランス政府は一九八〇年代後半にフランス語からの／への翻訳を支援する政策を打ち出したが、これにはより文化的な動機があった。書籍の国際的な流通における市場の論理がおよぼす効果――とりわけ文化的多様性の削減と英語支配の高まり――に対抗しようとしたのだ。

経済的要因――市場の論理

印刷物の流通は、出版業界と配本ネットワークに依存している。出版業界における資本主義化の進展が、流通の起爆剤になった。一九世紀初頭の工業化の進展とそののちの新しい配送手段の発達が流通を促進した。製本業はライプツィヒ、パリ、ロンドンのような都市に集中し、各言語圏の文化の中心になっていった。しかし、こういった地域における書籍の流通は、生産ネットワークだけでなく配本ネットワークに依拠してもいる。ベイルートやカイロには古くから出版の伝統があるが、そのようなネットワークがないためアラビア語圏の国家間を横断する本の流通がいまなお難しくなっている。ラテンアメリカの事例が示すように、国家間の競争も妨げになるケースがある。フランス政府がラテンアメリカ各国の異なる出版社とフランス語からスペイン語への翻訳の共同出版を促進しようとしても、難色をしめされることもある（二〇〇八年三月、チリのサンティアゴのフランス政府代表へのインタビュー）。

このように印刷業は、二種類のフロンティアの周辺に形成されている。つまり、文化的（言語的）フロンティアと政治的フロンティアだ。同じ語圏内での法的越境は、国家間の政治、経済、文化における力関係次第になる。たとえば、現在メディア・コングロマリットのラガルディールの子会社であるアシェット・インターナショナルは、アフリカの元フランス植民地の教育出版市場で八五パーセントのシェアを占めている。ここでは出版産業が未発達なのである（Perucca; Pinhas）。

国際ブックマーケットは一八八六年以降「文学的及び美術的著作物の保護に関す

るベルヌ条約」の下にあり、出版社は著作権法が有効な期間は原著の発行元や文芸エージェントから販売権か翻訳権を購入するよう求められる（七〇年のケースが多いが、国によって期間は異なる）。著作権法は、出版関連業の成立とブックマーケットにおける規範の確立に寄与し、著者と翻訳家を盗作から保護しつつも、貧しい国では出版社の多くが権利を買いとることができないことを考えれば、出版中心地の力の根源である書籍の流通を制限するものとも見なすことができる（ヴェヌティ 327）。フランスの法律の「著作権（ドロワ・ドルツゥール）」によって定義された著作者人格権を踏襲することで、ベルヌ条約は翻訳作品における「監査権（ドロワ・ドリーガル）」も著者に保証している（出版社や翻訳家を選べること、翻訳の品質、テキストの変更）。この著作者人格権の条項が自由貿易の妨げになるという理由で、アメリカ合衆国はベルヌ条約に加盟しようとしなかった。そのため、一九九四年の WTO の「知的所有権の貿易関連の側面に関する協定」（TRIPS）は、著作者人格権条項を回避している。その結果この協定は、ベルヌ条約以降、高級出版業界で主流だった原文重視の規範を切り崩す可能性もあったが、そのような流れは原著の出版社が変更や削除をしないように求めるのと同様、著作者人格権を著者に与えるように契約書に盛りこむことで抑制されている。

語圏内／横断の書籍流通の「境界」設定も契約交渉の重要な論点である。出版社は世界規模の翻訳権を要求する傾向があるが、原典の出版社は権利を同じ言語圏の異なる出版社に分割しようとし、その場合契約書に配本地域を付記することになる（カバーされていない地域は「オープンマーケット」になる）。イギリスの出版社は通常、ヨーロッパ諸国とインドのような旧植民地を自分の縄張りと考えるが、アメリカの出版社は北米を超えて太平洋まで縄張りを拡大しようとしている。以下の多国籍巨大コングロマリット傘下の高級インプリントの社長へのインタビューの抜粋を見てみよう。

> 私どもはつねに契約書にテリトリーのリストをつけてきました。これはオープンマーケットに関するもので、できるかぎり多くのテリトリーを獲得できるように細心の注意を払っています。イギリスの出版社は伝統的に、かつて帝国だったころ英連邦に属していたテリトリーをすべてもっています。アメリカ合衆国は帝国ではないので、ひどく骨を折って切り崩さなくてはならなかったのです。どうしてインドでの販売権を自動的に手に入れられるんです？　インドはもうイギリスの植民地ではないんですよ。南アフリカも、シンガポールも、マレーシアも、香港もそうです。私どもはカリフォルニアから太平洋に面しています。そちらに売りこむ方が楽です……。はい、海峡を渡ればすぐにヨーロッパです。ですが、なぜアジアを望んではいけないのでしょう？　南米でもアフリカでもアジアでもやりあいますよ。だから常に争いの種なんです。笑ってしまったのは、イギリスの出版社の本を買ってみると、大陸ごとのテリトリー一覧が付けられていたんです。そうしたらなんと南極大陸があって。下に「英国領南極大陸」って書いてあったんです。南極大陸は分割されていますから、英

国領南極大陸があるわけなんですが、そんなの見たことがなかったもんであははと笑ってしまいましたよ……。でも向こうはテリトリー一覧に入れて、うちらアメリカ人が南極大陸に本を売りにいけると思わないようにしているわけです。あれには本当に笑いましたよ。

二〇〇七年一〇月五日のインタビュー

このように、書籍の生産と流通には商業主義の論理がかかわっており、多くの場合、ほかの論理に優先する。ブックマーケットが自由化されている国では特にそうである。アメリカやイギリスでは、文化製品はまず第一に商品であって、収益に適わなければならない。このことは『フィフティ・シェイズ・オブ・グレイ』のような世界規格のベストセラーの制作過程を見ればよくわかる（Illouz）。グローバリゼーションの時代では、出版産業は巨大コングロマリットに次第に支配されていき、収益性と経営という厳しい基準のもと、文芸作品としての価値や専門性は蔑ろにされてしまう（Bourdieu “Conservative Revolution”; Thompson; シフレン）。こういった生産の集中は、バーンズ＆ノーブルのようなチェーン店に配本が集中することによって甚だしいものになる。こうしたチェーン店はベストセラー中心の取り扱いをするのである。結果として、かなりの数の書籍が小売店で販売されることすらない。アメリカの翻訳書は特にそうだ。というのも、翻訳は商業的価値が低いという通念があるからだ。

結果として、出版産業が資本主義によって発展すれば国家統制からは解放されるかもしれない一方で、市場は商業主義によるある種の検閲を発動させてしまいもする。この流れにアメリカやイギリスの独立系書店やインターネットによるセールスではまったく太刀打ちできていない。グローバリゼーションのダイナミクスが多くの国の地元の出版産業を刺激し、翻訳による文化交流を促しているとしても（世界の翻訳の数は、インデックス・トランスラチオヌムによれば一九八〇年から二〇〇〇年のあいだに五〇パーセント増加した）、この集中は文化の多様性にマイナスの影響を与えている（Sapiro “Globalization”）。インデックス・トランスラチオヌムによれば、一九八〇年代には四五パーセントだった英語からの翻訳の割合は、一九九〇年代には五九パーセントにまで増加した。同時に、アメリカとイギリスにおける翻訳のシェアは世界最低の水準である——じつに三パーセントだ。

出版場における翻訳の立ち位置を突きとめるためには、大規模出版と小規模出版の両極に偏るその構造を理解しなくてはならない（Bourdieu *Field of Cultural Production*; Bourdieu “Conservative Revolution”）。（ベストセラーに代表される）大規模出版の極では短期の薄利多売の法則が幅を利かせるのに対し、（目下問題にしている文学場の場合のような）小規模出版の極では文化生産の場特有の論理と価値が商業主義に優先する。この二極化の構造は、翻訳の世界市場にもあてはまる（Sapiro “Translation and the Field of Publishing”）。

英語からの翻訳は商業的ジャンル（スリラーや恋愛小説など）では主流であり、

マスマーケットむけでもあって、言語的多様性はきわめて低い。そのうえ英語から翻訳された作品は、その分野で、後発の現地語作品と競合することもしばしばである。このようなマスマーケットむけ書籍の世界的流通は、一方では多国籍コングロマリット企業によって、他方では別々の国の出版社がたがいに模倣しあう傾向（つまりほかの国で以前売れた本の権利を獲得すること）によって後押しされている——模倣は、市場（ここではグローバル書籍市場を指す。出版における異質同型現象については Franssen and Kuipers を参照のこと）における異質同型現象を一部説明してくれる。

このような知見はアメリカやイギリスの出版界で、翻訳のシェアがどうして低いのかを説明してくれる。大規模な出版場の極には翻訳はほとんどない。翻訳は儲からないと思われているからだ。対照的に、小規模出版の極では、訳書の原語もはるかに多様である。文芸書はさらにそうで、書籍の中でももっとも多様性にあふれるカテゴリーになっている。たとえばフランスでは、翻訳は文芸書の新刊の三分の一以上を占めている。じつに三六言語・四〇か国以上からフランス語に訳されたものだ。しかし、商業的制約は小規模出版の極にも徐々に強くなってきており、独立系出版社が熱心に「国際文学」と呼ばれる文芸書のプロモーションにとりくんでいるにもかかわらず、とくにアメリカとイギリスはそうである（Sapiro “Globalization”）。

文化的要因

翻訳の実践は書籍市場の出現よりも早く、その発展に貢献した。過去にさかのぼれば、最古の翻訳ベストセラーは聖書である。一四五五年に初めて印刷され、現在にいたってもなおもっとも翻訳されたテキストでありつづけている（四〇〇近くの完訳があり、二三〇〇近くの部分訳がある）。聖典が広く普及したのは、宗教的な要素のみならず出現しつつあった市場の論理のおかげだったのである。しかし聖書の翻訳は印刷物として流通するよりも前から存在し、宗教場とは切っても切れない大きな争いごとの種である。

翻訳は文学・出版場がかたちづくられるうえでも決定的な役割をはたした。テキストのコーパスを打ち建てることで、国語の標準化に寄与したのだ。場合によっては、現地語テキストの生産が発展するずっと前からのこともある。翻訳はまた、近代的な小説を書くための道具やモデルも提供した（Even-Zohar 45–52）。このような経緯はフランコ・モレッティが名づけた「ジェイムソンの法則」を裏書きするものだ。この法則は日本やインドの小説は西洋の形式と現地の素材のハイブリッドであるというジェイムソンの分析にちなんでいる。

> 文学システムにおいて周辺に属する文化（つまり、ヨーロッパ内外のほぼすべての文化）では、近代小説は当初、自発的に発展したのではなく、西欧（通例フランスかイギリス）の形式の影響と地域独特の材料との妥協から生まれたのだ。（モレッティ 74）。

翻訳されることの多い作品が世界文学の新たなキャノンになる（カザノヴァ）。世俗語の近代文学のキャノンが、ギリシア・ローマの古典と徐々に入れかわっていった。ただし、後者は第二次世界大戦までは翻訳の世界市場では主流でありつづけていた（Milo）。インデックス・トランスラチオヌムによれば、アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス、ホラティウス、プルタルコス、セネカ、プラウトゥス、タキトゥスのような著者が一九三〇年代初頭には翻訳の多い上位六〇人に入っていたが、第二次大戦後にリストから消えてしまった。プラトンだけが唯一生き残った。残りはトルストイ、ディケンズ、ドストエフスキー、バルザックにとってかわられた。これは翻訳の多い上位三〇人のリストのうち、常連となっている名前をあげたにすぎない。

新しいキャノンは、インドのノーベル文学賞受賞者、ラビンドラナート・タゴールのような少数の例外をのぞけばヨーロッパ文学に限られていた。一九五〇年代、ユネスコは「文学の相互浸透」を促進するため非西洋文化からの翻訳を奨励するプログラムを立ちあげた。このプログラムは、編集者や出版社にアジアやラテンアメリカの古典や近代の作品を翻訳することを奨励し、翻訳の国際マーケットの境界をヨーロッパから世界に広げることを狙っていた（とはいえ、サハラ以南のアフリカのような地域はまるごと市場から排除されていたし、現在も排除されたままである）。たとえばフランスでは、中国学者のルネ・エチアンブルが一九五三年にシリーズ「東洋の知」を立ちあげた。共産主義中国はユネスコのプロジェクトには含まれなかった。しかしエチアンブルはガリマール社のトップに、四〇年前より中国で起こっていた「文学革命」に関心をむけるため魯迅のような近代文学の作家を翻訳する必要性を説いた。エチアンブルは、一九五三年七月五日付の手紙でユネスコのプログラムの責任者であるロジェ・カイヨワに自分の目的をこう説明している。

> いままで訳されなかった（あるいは話題にしないほうがマシなほどひどい翻訳の）質の高い文学作品を、フランスの教養ある層が手に取れるようにすることです。該当の国家すべての風習や文化がよくわかるように選書した作品をです。手始めにインド、中国、日本です（ですが、ペルシャやアラブ世界もふくめたい）。
>
> 出版社も私も、手近な商業的な成功を求めてはいません。私たちは大衆を教育し、東洋とはなにか啓蒙したいのです。しかし言うまでもないことですが、とりわけ最初のうちは、大衆が自分自身を教育したくなるようなタイトルを持ってこなくてはなりません。娯楽要素がありながら、大衆がよく知らない人々について知ることができる小説です。アジアのすぐれた小説の大半はフランスでは知られていません。
>
> ガリマール社アーカイヴ、翻訳は著者による

この手紙は、外国の純文学（とりわけ周辺地域のもの）の翻訳には、教育的な効果があることを強調している。文学はその国の文化や風習を伝えるものだという通念は、フランスその他の地域での外国語や外国文化学習の根底にあるものでもあるが、ある種の周辺言語からの翻訳の増加を説明してくれる。事業の規模にもかかわらず（中国の大小説『紅楼夢』は二五〇〇頁もある）、一九六〇年の時点で刊行されていたシリーズは一〇タイトルだった。予想にたがわず、セールスは控えめなものだったとしても（平均一一八九部）、フランス文化と出版のギャップを埋め、批評家の高評を得た。

このシリーズは、政治や経済の制約から自由な、文化場における特有の論理を証だてるものだ（ブルデュー『芸術の規則』）。この論理はイデオロギーや経済的動機には還元できない。多くの著者、翻訳家、編集者、そして出版社でさえもが、エチアンブルの手紙からもわかるように、収益の望めないプロジェクトを引き受ける。代わりに、彼らはその場における認知という象徴的な利益を望める。

文学作品をある国の場から別の国へと輸入するのは、もともとの文脈の外で受容されることを意味し、解釈や、レーベル、序文、批評などを駆使した取り入れ戦略のための広大な空間が開けてくる。こうしたものは、受容側における特定の問題に照らしてのみ理解可能なものだ（Bourdieu “Social Conditions”; ダムロッシュ）。しかし文学史における受容のもっとも重要な側面はおそらく、外国文学を、新たな語りの技法をつくるためのモデルとして、また支配的な文学的規範を転覆させるためのモデルとして取り入れることだろう。たとえば、フォークナーやジョン・ドス・パソスはジャン・ポール・サルトルにとってそういった類のモデルだった（この種の取り入れのより具体的な例は、カザノヴァを参照のこと）。

社会的要因

文学作品の流通に作用する文化的要因は、社会集団間の力関係に組みこまれている。長いあいだ、世界文学のキャノンに封ぜられてきたのは主に西洋の白人男性作家だった。すでに見たように、一九五〇年代にはユネスコの篤志の施策のおかげで、それが非西洋の文化にも広がりはじめた。アジアやラテンアメリカの作家が国際的に認知されはじめるのは一九六〇年代から七〇年代にかけてのことである。文学賞はこの手の認知度をしめすよき指標である。もっとも権威ある国際文学賞であるノーベル賞について見るならば、ミゲル・アンヘル・アストゥリアスが一九六七年、川端康成が一九六八年、パブロ・ネルーダが一九七一年、ガブリエル・ガルシア・マルケスが一九八二年の受賞である。現在までのところ、受賞した唯一のアラブ人作家は一九八八年のナギーブ・マフフーズである。ポストコロニアル作家はさらに認知されるまで時間がかかり、関心を集めるために特有の戦略を練らなくてはならなかった（Huggan; Brouillette; Moudileno）。アフリカの作家が国際的な文学シーンで視界に入ってくるのは一九八〇年代になってからだ。たとえば、ウォーレ・ショインカがノーベル文学賞を受賞するのは一九八六年のことだ。一九八七年にターハル・ベン・ジェルーンが

アラブ人のフランス語作家としてはじめてゴンクール賞を受賞した。そしてベン・ジェルーンは、一九九〇年から二〇〇三年までのあいだに六作品が翻訳され、フランス語作家としてはアメリカで最も翻訳された作家となった。（ポストコロニアルのマグレブ作家たちのグローバル市場への参入については Lewis を参照のこと）。

ポストコロニアル作家の聖別は、文学作品の国別分類という慣習を見なおす一助になった。かつては国家的な、ひいては国際的な文学の権威が「国民」作家をプロモートする傾向があった。その国に二世代以上根を下ろし、文化の中心に居住し、中産階級か上流階級の出の作家たちだ。それに対して、以前は周辺に追いやられていた作家たちに注目が集まるようになった。一九九二年ごろからそういった作家たちの地理的・民族的出自が前景化されるようになったからだ。この年、セント・ルイスの詩人デレク・ウォルコットがノーベル文学賞を受賞し、スリランカ出身のカナダの作家マイケル・オンダーチェがブッカー賞を受賞し、マルティニークを拠点に活動するフランス人作家パトリック・シャモワゾーがゴンクール賞を受賞した。フランスでは「世界文学」という概念は、「フランス語の〈世界－文学〉のために」というマニフェストによって具体的な意味を持つようになった。これはジャン・ルオーとミシェル・ル・ブリ主導で、四四人の作家が署名し、二〇〇七年三月一五日の『モンド』紙に掲載されたもので、周辺の／ポストコロニアルの／国外志向の移民作家と、地位を確立したパリの作家を対比して、後者の内向きさ、ナルシスティックな気どりを非難している。つづいてガリマール社より論集が刊行され、マニフェストはフランスおよびフランス語圏研究の研究者のあいだで国際的な議論を巻き起こした（たとえば Miller を参照のこと）。しかしデュクルノーが指摘するように、マニフェストの署名者の多くが自分自身の著作はパリで出版しており（その多くが権威ある出版社のガリマールから）、そのことがフランスや国際的な市場での彼らの立ち位置を保証していた（Ducournau）。実際、すでに見たように、中心性と周辺性は生産手段によって媒介される。

女性もまた文学の権威の座から遠ざけられていた。多くの女性作家が一九世紀以降文学場や市場で活躍していたにもかかわらず、である。フランスでは、一九〇二年に創設されたゴンクール賞がはじめて女性に授与されたのが一九四五年のエルザ・トリオレである。ゴンクール賞のミソジニーに抗議するため女性作家二二人のグループが一九〇四年にフェミナ賞を立ちあげ、女性・男性のいずれかの作家に授与することにした。アカデミー・フランセーズに関しては、マルグリット・ユルスナールが最初の女性会員になったのが一九八二年であり、これはセネガルのレオポール・セダール・サンゴールが選出される前年のことである。翻訳の世界市場では、女性作家が占める割合はまだ低い。一九九〇年から二〇〇三年までにアメリカでフランス語から訳された文学作品のうち、女性の手によるものはたった四分の一だった。現代文学に限れば三分の一が女性によるものだ（Sapiro “Symbolic Capital”）。ノーベル文学賞の女性の受賞については言わずもがなだろう。女性の著者は受賞者一一四名のうち一二名

であり、一〇パーセントに満たない。一九九〇年代から女性の受賞のペースは目に見えて上がり、七名の著者が受賞している。ナディン・ゴーディマー、トニ・モリソン、エルフリーデ・イェリネク、ドリス・レッシング、ヘルタ・ミュラー、アリス・マンロー、スヴェトラーナ・アレクシェーヴィチだ。二〇世紀の最初の九〇年間にはたった五人の女性しか受賞者はいなかった——セルマ・ラーゲルレーブ、グラツィア・デレッダ、シグリ・ウンセット、ネリー・ザックス（とシュムエル・アグノン）。

一九六〇年代から今日に至るまでのグローバリゼーションの流れの中で、ポストコロニアル作家の包摂と並行して、世界文学キャノンの女性化が進行していると言える。とはいえ、こういった作家はみなグローバル文学市場の中心地で出版されており、メジャー言語で執筆された作品はいまなおマイナー言語で書かれたものよりも国際的に認知されやすい。

結論

古典のキャノンが近代のキャノンに入れかわってまもなく、一九五〇年代の終わりまでには翻訳された作家ランキングに占める非正典作家の割合が著しく増加した。これは（アガサ・クリスティーやピーター・チェイニーの書くような）スリラー小説の人気のおかげである。そして一九七〇年ごろには、そういった作家が下降傾向にある正典作家を数で上回るようになる（Milo）。この変化は、市場の要請が教育・文化的ヒエラルキーを覆したことを意味する。しかし国際的に聖別された作家（すなわち、文学賞受賞者）のパーセンテージが、アメリカのベストセラーリストでは一九七〇年代に五パーセントあったのが一九九〇年代には一パーセントにまで低下しても、同じ期間にその存在感はフランスやドイツでは高まった（Verboord）。このように、市場の論理は均一に広まるわけではない。

モレッティは進化論から二種類のモデルを引きだした。波と樹である。この二種類のモデルは文学史にあてはめることができ、二つの対照的なプロセスによって説明される。異質同型と差異化である。ネオ制度主義理論によれば、異質同型は以下の三種のメカニズムの結果である。制約、模倣、職業規範である（DiMaggio and Powell）。こうしたメカニズムは文化商品の生産条件にもあてはまる。権威主義政権では制約が同質化のための主な手立てになる。社会主義のキャノンは大部分がソ連によってほかの共産主義国に押しつけられたものだ。模倣は自由主義市場につきものである。出版社が国外の同業社がすでに選んだ作品を優先するのは、リスクを避けようとするためだ（Franssen and Kuipers）。職業規範は、各国の出版社の組合が結びついた国際組合や各国に支部をもつペンクラブなどによって世界中に広まっている。文芸エージェントも国ごとの出版場の職業規範を溶けあわせる役目をしている。こういった規範は出版場の中でも、大規模出版と小規模出版の両極のあいだで異なるかもしれない。たとえば、原作に忠実であること、重訳ではないことは、高級出版では広まっている二つの規範だが、商業ジャンルにはあてはまらない。

高級出版のこの規範は明らかに文学・学術場からきている。これらの業界ではロマン主義以来オリジナリティが至上命題だったのだ。オリジナリティは差異化の原則であって、クリエイティブ産業においては異質同型的傾向に歯止めをかける。オリジナリティの原則は、クリエイターと見なされる文化的プロデューサーの作品だけでなく、出版にも適用される。文芸出版社には「アイデンティティ」があり、製品にある種のラベルづけをする「ブランド」の役割をはたす。たとえば、ヌーヴォーロマンにとってのミニュイ社のように文学運動の中心としての役目をはたす出版社もある。出版社のブランドイメージは世界市場においては象徴資本に直結している——すなわち、著名な著者やノーベル文学賞などといったものである。模倣は決して自動的にもランダムにも起こらない。出版社は国内の同業社よりも外国の同業社の選択に追従する傾向がある。選択的親和力はアイデンティティの表明であり、卓越性となる（ブルデュー『ディスタンクシオン』）。卓越性の原則は国民国家にも適用される。誰もが国民国家は国民文学を持つべしと主張するのだ。文学の分類として国というカテゴリーは長きにわたって有力である。このことは、グローバル化の進展、多国籍企業の出現、国を超えた大規模出版の場の極における異質同型の進行にも影響されない。このことはこの差異化の論理のあらわれなのだ。差異化は「ポストコロニアル・エキゾチック」にもあてはまる。これをグラハム・フーガンは「文化の差異のグローバルな「見世物化」」と定義した。（Huggan 15）。最後に、外国文学の取りいれは決して自動的なものでも、模倣に留まるものでもない。それは、ジャンルや伝統文化と駆けあわされて差異化をももたらす（アパデュライ；ヴェヌティ 324）。異質同型を促進するメカニズムは均質化の波へと変わっていく一方で、差異化のプロセスは枝わかれを生み樹木のかたちになる。マスマーケットの沼に飲みこまれながらも、小規模出版の極は絶えず浮上し、その枝を伸ばしていく。

……

【著者紹介】
ジゼル・サピロ(Gisèle SAPIRO)
文学社会学者。フランス社会科学高等研究院研究主任。『作家たちの戦争』ほか著書多数。邦訳に『文学社会学とはなにか』（鈴木智之・松下優一訳、世界思想社）がある。翻訳社会学の分野においても研究成果を発表している。

【訳者紹介】
秋草俊一郎(AKIKUSA Shun’ichiro)
比較文学・翻訳研究。日本大学大学院総合社会情報研究科准教授。著書に『ナボコフ訳すのは「私」——自己翻訳がひらくテクスト』『アメリカのナボコフ——塗りかえられた自画像』『「世界文学」はつくられる——1827-2020』。訳書に『出身国』『私の人生の本』

『翻訳　訳すことのストラテジー』など。

【引用文献】

Appadurai, A. (1996). *Modernity At Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.[アルジュン・アパデュライ（2004）『さまよえる近代――グローバル化の文化研究』門田健一訳、平凡社]

Apter, E. (2013). *Against World Literature: On the Politics of Untranslatability*. London: Verso.

Bourdieu, P. (1984 [1979]). *Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*, tr. R. Nice, Cambridge, MA: Harvard University Press.[ピエール・ブルデュー（1990）『ディスタンクシオン――社会的判断力批判　I・II』石井洋二郎訳、藤原書店]

Bourdieu, P. (1993). *The Field of Cultural Production: Essays on Art and Literature*, ed. R. Johnson, Cambridge: Polity Press.

Bourdieu, P. (1996 [1992]). *The Rules of Art: Genesis and Structure of the Literary Field*, tr. Susan Emanuel. Cambridge-Stanford: Polity Press-Stanford University Press.[ピエール・ブルデュー（1995）『芸術の規則　I』石井洋二郎訳、藤原書店　ピエール・ブルデュー（1996）『芸術の規則　II』石井洋二郎訳、藤原書店]

Bourdieu, P. (1999 [1989]). “The Social Conditions of the International Circulation of Ideas.” In *Bourdieu: A Critical Reader*, ed. R. Shusterman. Oxford and Malden: Wiley-Blackwell,: 220–228.

Bourdieu, P. (2008[1999]). “A Conservative Revolution in Publishing,” tr. R. Fraser, *Translation Studies* 1(2): 123–153.

Brouillette, S. (2007). *Postcolonial Writers and the Global Literary Marketplace*. New York: Palgrave Macmillan.

Casanova, P. (2004 [1999]). *The World Republic of Letters*, tr. M.B. DeBevoise. Cambridge, MA: Harvard University Press.[パスカル・カザノヴァ（2002）『世界文学空間――文学資本と文学革命』岩切正一郎訳、藤原書店]

Damrosch, D. (2003). *What is World Literature?* Princeton, NJ: Princeton University Press. [デイヴィッド・ダムロッシュ（2011）『世界文学とは何か？』秋草俊一郎・奥彩子・桐山大介・小松真帆・平塚隼介・山辺弦訳、国書刊行会]

DiMaggio, P. J. & Powell, W. W. (1983). “The Iron Cage Revisited: Institutional Isomorphism and Collective Rationality in Organizational Fields.” *American Sociological Review* 48: 147–60.

Ducournau, C. (2012). *Écrire, lire, élire l’Afrique. Les mécanismes de réception et de consecration d’écrivains contemporains originaires de pays francophones d’Afrique subsaharienne*. PhD dissertation, Paris: École des hautes études en sciences sociales, forthcoming with CNRS Éditions.

Even-Zohar, I. (1990). “Polysystem Studies.” *Poetics Today* 11(1): 175-191.

Franssen, T. & G. Kuipers. (2013). “Coping with Uncertainty, Abundance and Strife: Decision-Making Processes of Dutch Acquisition Editors in the Global Market for Translations.” *Poetics* 41(1): 48–74.

Heilbron, J. (1999). “Towards a Sociology of Translation: Book Translations as a Cultural World System.” *European Journal of Social Theory* 2(4): 429–444.

Heilbron, J. & G. Sapiro. (2007). “Outline for a Sociology of Translation: Current Issues and Future Prospects.” In *Constructing a Sociology of Translation*, eds. M. Wolf & A. Fukari, Amsterdam: John Benjamins: 93–108.

Huggan, G. (2001). *The Postcolonial Exotic: Marketing the Margins*. London: Routledge.

Illouz, E. (2014). *Hard-Core Romance: “Fifty Shades of Grey,” Best-Sellers, and Society*. Chicago, IL: University of Chicago Press.

Jacquemond, R. (2009). “Translation Policies in the Arab World. Representations, Discourses, Realities.” *The Translator* 15(1): 1–21.

Lewis, M. A. (2013). *The Maghreb Goes Abroad: The “Worlding” of Postcolonial North African Francophone Literature and Film in a Global Market*. PhD dissertation, Yale University.

Loiseaux, G. (1995). *La Littérature de la défaite et de la collaboration, d’après “Phonix oder Asche?” de Bernhard Payr*. Paris: Fayard.

Miller, C. (2011). “The Theory and Pedagogy of a World Literature in French.” *Yale French Studies* 120: 33–48.

Milo, D. (1984). “La bourse mondiale de la traduction: un baromètre culturel.” *Annales* 1: 92–115.

Moretti, F. (2000). “Conjectures on World Literature,” *New Left Review* 1 (January–February), 1–12; reprinted in D. Damrosch, ed., (2014). *World Literature in Theory*. Oxford: Wiley-Blackwell. [フランコ・モレッティ（2016）「世界文学への試論」『遠読——＜世界文学システム＞への挑戦』秋草俊一郎・今井亮一・落合一樹・高橋知之訳、みすず書房]

Moudileno, L. (2011). “Fame, Celebrity, and the Conditions of Visibility of the Postcolonial Writer.” *Yale French Studies* 120: 62–74.

Pinhas, L. (2005). *Éditer dans l’espace francophone*: *législation, diffusion, distribution et commercialization du livre*. Paris: Alliance des éditeurs indépendants.

Perucca, B. (2010). “La France règne en maître sur le marché des manuels scolaires en Afrique francophone”. *Le Monde*, June 10.

Popa, Ioana. (2010). *Traduire sous contraintes. Littérature et communisme*. Paris: CNRS Éditions.

Rundle, C. (2010). *Publishing Translations in Fascist Italy*. Oxford: Peter Lang.

Sapiro, G. (2003). “The Literary Field between the State and the Market.” *Poetics* 31(5–6): 441–461.

Sapiro, G. (2008). “Translation and the Field of Publishing. A Commentary on Pierre Bourdieu’s ‘A Conservative Revolution in Publishing’ from a Translation Perspective.” *Translation Studies* 1(2): 154–167.

Sapiro, G. (2010). “Globalization and Cultural Diversity in the Book Market: The Case of Translations in the us and in France.” *Poetics* 38(4): 419–39.

Sapiro, G. (2015). “Strategies of Importation of Foreign Literature in France in the Twentieth Century: The Case of Gallimard, or the Making of an International Publisher.” In *Institutions of World Literature: Writing, Translation, Markets*, eds. S. Helgesson & P. Vermeulen. London: Routledge: 143–159.

Sapiro, G. (2015). “Translation and Symbolic Capital in the Era of Globalization: French Literature in the United States.” *Cultural Sociology* 9(3): 320–346.

Sapiro, G. ed. (2008). *Translatio. Le marché de la traduction en France à l’heure de la mondialisation*. Paris: CNRS Éditions.

Schiffrin, A. (2000). *The Business of Books*. New York: Verso.[アンドレ・シフレン（2002）『理想なき出版』勝貴子訳、柏書房]

Tarde, G. (1903 [1890]). *The Laws of Imitation*. New York, NY: Henry Holt.[ガブリエル・タルド（2007）『模倣の法則』池田祥英・村澤真保呂訳、河出書房新社]

Thompson, J. B. (2010). *Merchants of Culture: The Publishing Business in the Twenty-First Century*. Cambridge: Polity Press.

Thomson-Wohlgemuth, G. (2009). *Translation under State Control: Books for Young People in the German Democratic Republic*. New York and London: Routledge.

Venuti, L. (1998). *The Scandals of Translation. Towards an Ethics of Difference*. New York London: Routledge.[ローレンス・ヴェヌティ（2022）『翻訳のスキャンダル——差異の倫理にむけて』秋草俊一郎・柳田真理訳、フィルムアート社]

Verboord, M. (2010). “Market Logic and Cultural Consecration in French, German and American Bestseller lists, 1970–2007.” *Poetics* 39(4): 290–315.

復刻・対訳・評釈

復刻・対訳（順送り訳）・評釈の試み 2

三ツ木道夫

KLEINE GESCHICHTE DER PHOTOGRAPHIE
写 真 小 史

Von Walter Benjamin
ヴァルター・ベンヤミン 筆

„Die Literarische Welt“ Nr.38, 7. Jahrgang
「文学世界」第 7 巻 38 号
Freitag 18. September1931
1931 年 9 月 18 日 金曜日

Abstract

Hat man sich lange genug in so ein Bild vertieft, erkennt man, wie sehr auch hier die Gegensätze sich berühren: die exakteste Technik kann ihren Hervorbringungen einen magischen Wert geben, wie für uns ihn ein gemaltes Bild nie mehr besitzen kann. Aller Kunstfertigkeit des Photographen und aller Planmäßigkeit in der Haltung seines Modells zum Trotz fühlt der Beschauer unwiderstehlich den Zwang, in solchem Bild das winzige Fünkchen Zufall, Hier und Jetzt, zu suchen, mit dem die Wirklichkeit den Bildcharakter gleichsam durchgesengt hat, die unscheinbare Stelle zu finden, in welcher, im Sosein jener längstvergangenen Minute das Künftige noch heut und so beredt nistet, daß wir, rückblickend, es entdecken können.

語彙

sich vertiefen「沈潜する」＜ 形容詞 tief に非分離前綴り ver をつけて動詞化した／ berrühren「4 格に触れる、接する」／ exakt「精密な」／ Hervorbringungen「産み出したもの、作品」＜ 動詞 hervorbringen「4 格を産み出す」／ magisch「魔術的な」＜ die Magie「魔術」／die Kunstfertigkeit「熟練」＜ kunstfertig「熟練の」／ die Planmäßigkeit「計画通りであること」／ die Haltung「姿勢」／（3 格の名詞、代名詞の後ろに置き）zum Trotz「3 格に反して、逆

らって」／ der Beschauer「観察者」＜ beschauen「観察する、吟味する」／ unwiderstehlich「抵抗できない、圧倒的な」／ der Zwang「強制、義務」／ winzig「ごく小さな、取るに足らない」／ das Fünkchen ＜ der Funke「火花、きらめき」の縮小形／ Hier und Jetzt「ここで今」（ラテン語 hic et nunc ここで今）／ der Bildcharakter ＜ das Bild「イメージ、絵、写真」+ der Charakter「性格、特徴」／ durchgesengt ＜ durch（通過・貫通）+ sengen「4 格の表面を焼く、焦がす」／ unscheinbar「地味な、人目を惹かない」／ das Sosein「本質、エッセンス」（哲学用語）／ längstvergangenen ＜ längst「とっくに、とうに」+ vergangen「過ぎ去った」＜ vergehen「過ぎ去る、過去のものとなる」／ das Künftige ＜ künftig「未来の、将来の」／ heut＝heute ／ beredt「雄弁な、多弁な」／ nisten 「巣を作る、住み着く、巣食う」／ rückblickend「過去を振り返ってみる」＜ rück...(背面、背後などを示す前綴り) ＋ blickend ＜ blicken「見る、見やる」の現在分詞形

文法注釈

Hat man sich lange genug in so ein Bild vertieft,ここでも従属接続詞 wenn が省略されているため定動詞 hat が前置されている。／so ein Bild の so は不定代名詞、不定冠詞付き名詞の直前に置かれて「そういう、こういう」の意味となる。／die exakteste Technik kann ihren Hervorbringungen einen magischen Wert geben, wie für uns ihn ein gemaltes Bild nie mehr besitzen kann. wie 以下は主文の einen magischen Wert「一種の魔術的な価値」を代名詞 ihn で受けた関係文となっている。「私たちにとっては描かれた画像などではもはや持ちえないほどの魔術的価値」。／den Zwang, in solchem Bild das winzige Fünkchen Zufall, Hier und Jetzt, zu suchen, in 以下 zu suchen までは Zwang「強制、義務」の内実を説明する zu 不定句の付加語的用法。次の関係文を挟んで再び die unscheinbare Stelle zu finden という zu 不定句が現れる／mit dem die Wirklichkeit den Bildcharakter gleichsam durchgesengt hat, 主語は die Wirklichkeit「現実」で、それが目的語 Bildcharakter を貫通して焦げ目のようなものを産み出す／die unscheinbare Stelle zu finden, in welcher, im Sosein jener längstvergangenen Minute das Künftige noch heut und so beredt nistet, welcher は die unscheinbare Stelle を先行詞とする関係代名詞女性 3 格、関係文の主語は das Künftige「これからやって来るもの」動詞は文末の nistet で「目につかない場所にこれからやって来るものが今でも、また声を上げて巣食っている」／ so beredt nistet, daß wir, rückblickend, es entdecken können. so---daß は英語の so---that と同じ。現在分詞 rückblickend は「思い返してみると、振り返ってみると」と主語 wir の行為 entdecken に付随するもう一つの行為や状態を表現する「述語的付加語」として使われている。例 Dies hörend, brach die Frau in Tränen aus.「これを聞くと、その女性は泣き出した」など。一語からなる分詞構文とみることもできるが、やはり意味上の主語は wir。Aller 以下 7 行の文章の骨組みは以下のとおり：**大きな副詞句**（Aller から zum Trotz まで）+ **定動詞** (fühlt) + **主語**（der Beschauer）+ **目的語**（den Zwang）, **zu 不定詞句** (Zwang の内容補足) + **関係文**，再び **zu 不定詞句** (Zwang の内容補足) + **関係文**, + さらに**原因**（so beredt）と**結果を示す** daß（=dass）

副文。

順送り訳

人が長い時間こうした写真に沈潜すると、人は認識するのだ、ここでもどれほど多くの矛盾点が触れ合っているのかを。つまりこのもっとも厳密な技術はそれが産み出したものに魔術的な価値を与えられるのであり、（そういう価値を）私たちにとって絵画ではもはや持つことができない。写真術師のすべての熟練と彼のモデルの姿勢のうちにあるすべての計画性にもかかわらず、観る者はいやおうなく強制を感じる、そうした写真のうちに偶然という僅かな火花、今ここを求めるという（強制を）、それによって現実が写真の性格をいわば貫通して焦げ目を作り出してしまったような（火花）を、目につかない個所を見つけるという（強制を）、その個所に、とっくに過ぎ去った数分間の本質のうちにこれからやって来るものが巣を作っていてそれは今日でも雄弁なため、私たちは、過去を振り返ってみると、それを見つけ出せるのだ。

Es ist ja eine andere Natur, welche zur Kamera als welche zum Auge spricht ; anders vor allem so, daß an die Stelle eines vom Menschen mit Bewußtsein durchwirkten Raums ein unbewußt durchwirkter tritt. Ist es schon üblich, daß einer, beispielsweise, vom Gang der Leute, sei es auch nur im groben, sich Rechenschaft gibt, so weiß er bestimmt nichts mehr von ihrer Haltung im Sekundenbruchteil des »Ausschreitens«. Die Photographie mit ihren Hilfsmitteln: Zeitlupen,Vergrößerungen erschließt sie ihm.

語彙

unbewußt「無意識に」／ durchwirkt 過去分詞だが ge がないので非分離動詞 ＜ durchwirken mit「---を～（4 格）に織り込む」／ grob「目の粗い、大まかな」、im groben（Umrissen）「大まかに」／ sich（3 格）von 3 格 Rechenschaft geben「～について説明（釈明）する」／der Sekundenbruchteil「1 秒ごとに分割した 1 部分」＜ die Sekunde「秒」+ der Bruchteil「1 部分、微小な部分」／ das Ausschreiten「大股歩き」＜ ausschreiten「大股で進む」／ Zeitlupen ＜ die Zeitlupe 「高速度撮影」／ Vergrößerungen「引き伸ばした写真」（複数形ゆえ、「拡大」などの抽象的な意味ではなく、具体的な意味になる）＜ vergrößern「～を拡大する、引き伸ばす」＜ größer ＜ groß／ erschliesen「～を解明する、打ち明ける」

文法注釈

andere Natur, welche zur Kamera als welche zum Auge spricht. welche という単語が二度、ともに「自然 Natur」に関連して登場する。最初の welche は Natur を先行詞とする関係代名詞、「カメラに語りかけるのは別の自然」、als は ander（～とは別の）と対になり、比較の対象を示している。とすると 2 度目の welche は Natur を先行詞とする関係代名詞とも、名詞の

反復を避けるために用いられる不定代名詞（ただし無冠詞で用いられる名詞の代用のみ）とも考えられる。いずれにせよ、welche zur Kamera als welche zum Auge という曲芸めいた表現が試みられている。この文章も Es ist 名詞＋関係文からなる一種の強調構文／ sei es auch nur im groben, sei es———は「～であろうと」という認容を示す。auch は認容文の目印にもなる／Ist es schon üblich, daß einer, beispielsweise, vom Gang der Leute, sei es auch nur im groben, sich Rechenschaft gibt, はまたしても従属接続詞 wenn の省略によって定動詞 ist が文頭に来ている形。主語は不定代名詞 einer で「ある人が」の意味だが、不定代名詞 man とは異なり、人称代名詞 er に言い換えることができる。そのため so で始まる主文では既出の主語 einer が er に言い換えられている。／ erschließt sie ihm 3 格目的語と 4 格目的語の配置ルール。その 1 両方とも名詞なら 3 格・4 格の順、その 2 どちらかが代名詞なら代名詞・名詞の順、その 3 両方とも代名詞なら 4 格・3 格と並べるのが標準的な配語法。ここで使われた ihm は前節の不定代名詞 einer の 3 格形、4 格の sie は Haltung「姿勢」

順送り訳

カメラに語りかける自然は、目に語りかけるそれとは別ものだ。とりわけこんな風に違っている、すなわち人間によって意識を織り込まれた空間の代わりに、意識されずに織り込まれる空間が現れてくるのだ。いまや普通になっていること、つまりある人が、例えば、それが大まかな意識ではあっても、人々の歩き方について説明することが普通のことだとしても、この人は「大股歩き」の 1 秒ごとの人々の姿勢についてはきっと何も知りはしない。写真はその補助手段、つまり高速度撮影とか拡大画像でそれをその人に解明してくれるのだ。

Von diesem Optisch-Unbewußten erfährt er erst durch sie, wie von dem Triebhaft-Unbewußten durch die Psychoanalyse. Strukturbeschaffenheiten, Zellgewebe, mit denen Technik, Medizin zu rechnen pflegen － all dieses ist der Kamera ursprünglich verwandter als die stimmungsvolle Landschaft oder das seelenvolle Porträt.

語彙

Optisch ＜ optisch「光の、視覚の」／ Triebhaft ＜ triebhaft「衝動的な、本能的な」／ die Beschaffenheit「性質」＜ beschaffen「～の性質をもった」／ das Zellgewebe「細胞組織」＜ die Zelle「小部屋、細胞」＋ das Gewebe「布地、組織」／ mit 3 格 rechnen「～を当てにする、考慮に入れる」／ pflegen + zu 不定句で「～するのを常とする、習慣とする」／ verwandter ＜ verwandt「血縁関係にある、親和性のある」の比較級／ stimmungsvoll「情緒豊かな」＜ die Stimmung「気分」+ voll ／ seelenvoll「感情のこもった」＜ die Seele「魂」+ voll

文法注釈

関係文 mit denen Technik, Medizin zu rechnen pflegen は Strukturbeschaffenheiten, Zellgewebe を

先行詞とし、mit 3 格 rechnen という表現の都合上、関係代名詞は複数 3 格形 denen となった。関係文の主語は Technik, Medizin 「工学や医学」、die Technik であり die Medizin だが、それぞれの学問分野の総称であるため無冠詞で使われている／all dieses の all は無語尾で使われている。例：All diese Kinder sind hübsch.「これらすべての子供たちは～」など。dieses は人称代名詞 es、指示代名詞 das と同じで、前文の内容を受ける中性 1・4 格形「こうしたことは（を）・このようなものは（を）」すべて。

順送り訳

この視覚では意識されないものについて、人は初めてそれを通じて聞き知るのだが、それは人が心理分析を通じて衝動にかかわる意識されないものについて聞き知るのと同じなのだ。構造上の諸特性や細胞組織、それらを工学や医学は当てにするのがいつものことなのだが、そうしたすべてはもともと、情緒豊かな風景や感情のこもった肖像画よりも写真に親和性を示すものなのだ。

Zugleich aber eröffnet die Photographie in diesem Material die physiognomischen Aspekte, Bildwelten, welche im Kleinsten wohnen, deutbar und verborgen genug, um in Wachträumen Unterschlupf gefunden zu haben, nun aber, groß und formulierbar wie sie geworden sind, die Differenz von Technik und Magie als durch und durch historische Variable ersichtlich zu machen. So hat Bloßfeldt[2] mit seinen erstaunlichen Pflanzenphotos in Schachtelhalmen älteste Säulenformen, im Straußfarn den Bischofsstab, im zehnfach vergrößerten Kastanien- und Ahornsproß Totembäume, in der Weberkarde gotisches Maßwerk zum Vorschein gebracht.

2 Karl Bloßfeldt: Urformen der Kunst. Photographische Pflanzenbilder. Hrsg. mit einer Einleitung von Karl Nierendorf. 120 Bildtafeln . Berlin o. J. [1928] .

語彙

zugleich「同時に」／ eröffnen「～を知らせる、sich＋3 格で心中を打ち明ける」／ physiognomisch「人相学、骨相学上の」＜ die Physiognomie「人相、動物や植物の形状・外観」／ der Aspekt「観点、相」／ Bildwelten ＜ das Bild「イメージ、像」 ＋ die Welt「世界」（複数形は Welten）／ deutbar「解釈できる、説明できる」＜ deuten「～を解明する、占う」／ verborgen「隠された、秘密の」＜ verbergen「～を隠す、秘密にする」／ Wachtäumen ＜ der Wachtraum「白昼夢、夢想」＜ wach + der Traum／ der Unterschlupf 「避難所、隠れ家」／ formulierbar「言葉で表現できる、公式化できる」＜ formulieren「言葉で述べる、的確に言う」／die Differenz 「差、不一致」／ die Variable「変数」／ durch und durch「すっかり、完全に」／ ersichtlich「目に見える、明白な」＜ ersehen「～を aus 3 格から見て取る」／ erstaunlich「驚くべき、奇妙な」＜ erstaunen 「～を驚かす、über 4 格に驚く」／ der Schachtelhalm「トクサ属の植物」／ Säulenformen ＜ die Säule「柱、円柱」＋ die Form「形、

形式」／ der Straußfarn「シダ」／ der Bischofsstab ＜ der Bischof 「司教、監督、主教」 + der Stab「竿、杖」／ zehnfach「10 倍の・10 倍に」／ Kastanien- und Ahornsproß「マロニエやカエデの芽」＜ der Sproß「新芽、若芽」／ Totembäume ＜ der Totembaum ＜ das Totem「トーテム（氏族を象徴する自然物）」＋ der Baum」／ die Weberkarde「オニナベナ」（植物名）／ gotisch「ゴート人の、ゴシック様式の」／ das Maßwerk「窓の飾り格子」／ 4 格 zum Vorschein gebracht ＜ bringen 「～を出現させる」＜ der Vorschein 「出現、顕れ」

文法注釈

Zugleich から machen まで続く文章は下線部からも見て取れるように、実に込み入った（手の込んだ）構造となっている。骨子は die Photographie（主語）eröffnet（定動詞）die physiognomischen Aspekte（4 格目的語）、Bildwelten（4 格目的語の同格）deutbar und verborgen genug（目的補語）、um---gefunden zu haben（判断の根拠やその結果を示す「～なのは---だったからだ」・「---だったくらい～なのだ」）。um...zu...が完了不定詞＝過去を示す表現になっていて verborgen genug にかかっている。つまり写真は「die physiognomischen Aspekte が deutbar（いろいろと解釈できる）ものであることを見せてくれたが、それらがこれまで verborgen（隠されて）きたのは、その居場所を夢想のうちに見つけてきたためだ。 nun aber「だが今では」で対比的な表現が導かれる。groß und formulierbar wie sie geworden sind は理由や原因を示す副文「それらは大きくなり言葉でも言い表せるようになったのだから」、例：Der König schloss die Augen und verfiel dann, todesmüde wie er war, in den Schlummer.「王は目を閉じると、死ぬほど疲れていたので、そのまま眠り込んでしまった」die Differenz von Technik und Magie als durch und durch historische Variable ersichtlich zu machen.は結果を示す um----zu　不定詞。um はどこかといえば、2 行上の um in Wachträumen Unterschlupf gefunden zu haben の um が行を跨いでつながっている。「結果として科学技術と魔術との差が歴史的な変数に過ぎないことを明白にしている」。／So hat Bloßfeldt に続く文では、場所を表現する前置詞句に 4 格目的語が続くという形が繰り返されている。例 in Schachtelhalmen älteste Säulenformen「トクサの姿のうちに往古の円柱形式を」以下同じ形式が 3 度出現する。

人名･用語解説

カール・ブロースフェルト（Karl Bloßfeldt 1865-1932）原注2にもあるとおりドイツの植物写真家。彫刻家でもあった。

順送り訳

しかし同時に写真はこの素材において、あれら外観上の姿が、微細なもののうちにある形象の世界であって、解釈を許すものであり、白日夢のうちに隠れ家を見つけてきたほどに隠されてきたものでもあったことを知らせている、だが今や、それらは大きく言葉で説明できるほどになってしまったので技術と魔術の違いはまったくのところ歴史的な変数に過ぎない

ことが明らかとなった。そういうわけブロースフェルトはその驚くべき植物写真でもって、トクサの姿のうちに往古の円柱形式を、シダの姿のうちに司教杖を、10 倍に拡大されたマロニエやカエデの芽の姿のうちに木彫りのトーテム像を、オニナベナの姿のうちにゴシック様式の飾り格子を出現させたのである。

原注２

カール・ブロースフェルト、『芸術の原形式　写真術による植物画像』カール・ニーレンドルフ編、序文カール・ニーレンドルフ、写真 120 葉　ベルリン、出版年記載なし（1928 年）

Darum sind wohl auch die Modelle eines Hill nicht weit von der Wahrheit entfernt gewesen, wenn ihnen » das Phänomen der Photographie « noch »ein großes geheimnisvolles Erlebnis« war; mag das für sie auch nichts als das Bewußtsein gewesen sein, » vor einem Apparat zu stehen, der in kürzester Zeit ein Bild der sichtbaren Umwelt erzeugen konnte, das so lebendig und wahrhaft wirkte wie die Natur selbst. « Man hat von der Kamera Hills gesagt, daß sie diskrete Zurückhaltung wahre. Seine Modelle ihrerseits sind aber nicht weniger reserviert; sie behalten eine gewisse Scheu vor dem Apparat , und der Leitsatz eines späteren Photographen aus der Blütezeit: »Sieh nie in die Kamera« könnte aus ihrem Verhalten abgeleitet sein.

語彙

das Phänomen「現象、出来事、珍事」／geheimnisvoll ＜ das Geheimnis + voll／nichts (anderes) als ---「…のほかは何もない、…しかない」／erzeugen「～を生産する、発生させる」／lebendig「生きている、生きいきした」／wahrhaft「本当の、純粋な」／diskret「慎重な、目立たない」／die Zurückhaltung「遠慮、控え目」＜ zurückhalten「～を抑止する」「mit 3 格…を控える」／wahre ＜ wahren「保持する、保つ」の接続法第１式形／ ihrerseits「彼女の側で、彼らの側で」＜ ---seits は所有冠詞などと---erseits の形で「～の側で、立場で」という意味を作り出す、meinerseits「私の方では、私の側で」など／reserviert「控え目の、打ち解けない」／die Scheu「不安感、遠慮」／der Leitsatz「原則、主旨」／ abgeleitet ＜ ableiten「～を von/aus…から導き出す」

文法注釈

eines Hill 不定冠詞＋人名で「～のような人」／ mag das für sie auch nichts als das Bewußtsein gewesen sein,　認容文 wenn ...　auch ...　mag,「たとえそれが～であったにせよ」の wenn が省略された形／zu 不定詞句と関係文からなる vor einem Apparat zu stehen, der in kürzester Zeit ein Bild der sichtbaren Umwelt erzeugen konnte は das Bewußtsein を説明する付加語的用法／さらにこの関係文中の ein Bild を先行詞とする関係文 das so lebendig und wahrhaft wirkte wie die Natur selbst.が続いている。／「 , und 」について。und は並列の接続詞だが、und が結

ぶ文が前文と「対立／因果関係」あるいは「認容」の意味を持つ場合は und の前に「,（コンマ）」を置く。

順送り訳

それゆえ多分ヒルのような人のモデルたちも真実から遠く隔たっていたわけではなかった、》写真(に撮られる）という出来事《　が、いまだに　》神秘的な大きな体験《　だったとすれば。それが彼らにとっても　》ある機械の前にそれは目に映る周辺世界の像をあっというまに産み出すことができ、その像はもともとの自然と同じくらい生き生きとしていて本物と同じに働きをする《　と意識しただけだったにしても。人はヒルのカメラについてこう言った、それは控えめで目立たないようにしていた、と。彼のモデルの側も、劣らず控えめだった。だから彼らは機械の前ではある種、遠慮がちなままで、だから後発の最盛期の写真家の掛け声　》カメラに見入ってはだめですよ《　にしても、それは彼らの振る舞いから出てきたものだったのかもしれないのだ。

Doch war damit nicht jenes »sehen dich an« von Tieren, Menschen oder Babys gemeint, **das** den Käufer auf so unsaubere Weise einmengt und **dem** nichts besseres entgegenzusetzen ist als die Wendung, mit welcher der alte Dauthendey von der Daguerreotypie spricht: »Man getraute sich... zuerst nicht, so berichtete er, die ersten Bilder, die er anfertigte, lange anzusehen . Man scheute sich vor der Deutlichkeit der Menschen und glaubte, daß die kleinen winzigen Gesichter der Personen, die auf dem Bilde waren, einen selbst sehen könnten, so verblüffend wirkte die ungewohnte Deutlichkeit und die ungewohnte Naturtreue der ersten Daguerreotypbilder auf jeden «.

語彙

Einmengen = einmischen 「混ぜる、（言葉巧みにがんらい無関係なものに）関わらせる」／entgegensetzen「3 格に～を対置する、対抗する」／die Wendung「言い回し」＝ die Redewendung／sich getrauen「（zu 不定詞句と）あえて…する、…する勇気がある」／ anfertigen「～を作る、製作する」／ vor 3 格 sich scheuen「3 格にしり込みする、避けようとする」／verblüffend ＜ verblüffen「～を唖然とさせる」／ ungewohnt「慣れていない」＜ gewohnt「普段の、いつもの、慣れている」 ／die Naturtreue「忠実な再現」＜ die Natur + die Treue「忠実」

文法注釈

jenes »sehen dich an« jenes の語尾 es が示す通り「あなたを見つめていますよ sehen dich an」という売り言葉を**中性名詞**として扱ったもの。その中性名詞扱いされたセリフを関係代名詞で受けてさらに説明するのが、das den Käufer auf so unsaubere Weise einmengt und dem nichts besseres entgegenzusetzen ist als die Wendung, mit welcher der alte Dauthendey von der Daguerreotypie spricht:。関係代名詞はまず 1 格 das、次に「このセリフに」という意味で 3 格

形 dem が使われている。下線を引いてあるように gut の比較級 besser が付加語となって不定代名詞 nichts（中性単数 1, 4 格のみ）に後置されている。比較級ゆえ比較の対象を示すのに als が使われている。比較されているのは例のセリフと als に続く die Wendung。さらにこの die Wendung を関係代名詞 welcher で引き継ぐのが次の関係文。mit という 3 格支配の前置詞との関係で、（先行詞が女性名詞ゆえ）der という関係代名詞も可能だが、それでは mit der der alte Dauthendey von der Daguerreotypie spricht と der が連続してしまう。こういう場合によく関係代名詞 welcher が用いられる。／ Man getraute sich... zuerst nicht, so berichtete er, die ersten Bilder, die er anfertigte, lange anzusehen の骨組みを考えてみると、主語は不定代名詞 man、sich getrauen の目的語は zu 不定詞句、die ersten Bilder lange anzusehen。この文で er という人称代名詞が使われるが、man は er に言い換えられないため、er は写真術師 Dauthendey のことを指している。／最後の文章前半 Man から könnten までの骨組みは関係文 die auf dem Bilde waren を取り除けて考えるとわかりやすい。 Man scheute sich--- und glaubte, daß die kleinen winzigen Gesichter der Personen einen selbst sehen könnten, daß (dass)文章のなかの einen はわかりにくいが、不定代名詞 man の 4 格形。人（man）が小さな顔となって写真に写っている、そういう人々の写真を見ていると、その小さな顔の人間の方が主語である「人を（man の 4 格形 einen）」見ているかもしれない、という構造。／ 後半の so verblüffend wirkte die ungewohnte Deutlichkeit und…末尾の auf jeden の jeden は、不定代名詞 jeder 「誰でも、すべての人」の 4 格形。auf 4 格 wirken は「～に影響を与える、効き目がある」。現在分詞 verblüffend はこの場合、定動詞 wirken に付随するもうひとつの働きを示す「述語的付加語」（副詞）と考える。

順送り訳

だが、これであの、動物や人間あるいは赤ちゃんが 》あなたを見つめていますよ《 というセリフのことが言われているのではなかった、これはフェアでないやり方で買い手を言いくるめるもので、これに対置されうるのはあの言い方よりいいものはない、それで（その言い方で）父ダウテンダイがダゲレオタイプ写真について語っていたような。すなわち 》人は最初のころ…勇気がなくて、と彼は報告していたが、自分が撮った初期の写真を長時間見つめることができなかった。人は（写っている）人間の明確さにしり込みしてしまい、こう信じたのだった、つまり写真の上にいる人々の、小さく、ちっぽけな顔が自分の方を見ているかもしれないと、それほど初期のダゲレオタイプ写真の、並々ならぬ明確さ、並々ならぬ忠実な再現ぶりは万人に作用し、人を唖然とさせたのだった《。

Diese ersten reproduzierten Menschen traten in den Blickraum der Photographie unbescholten oder besser gesagt unbeschriftet. Noch waren Zeitungen Luxusgegenstande, die man selten käuflich erwarb, eher in Caféhäusern einsah, noch war das photographische Verfahren nicht zu ihrem Werkzeug geworden, noch sahen die wenigsten Menschen ihren Namen gedruckt. Das menschliche Antlitz hatte

ein Schweigen um sich, in dem der Blick ruhte. Kurz, alle Möglichkeiten dieser Porträtkunst beruhen darauf, daß **noch** die Berührung zwischen **Aktualität und Photo** nicht eingetreten ist...

語彙

reproduzieren「～を再生・再現する、模写する、複製する」／ unbescholten「非のうちどころのない、品行方正の」＜ bescholten「評判の良くない」＜ schelten「～を叱る、非難する」／ unbeschriftet ＜ beschriften「（ラベルなどに）言葉を記す」／ Luxusgegenstände ＜ der Luxusgegenstand「贅沢品」＜ der Luxus 「贅沢」+ der Gegenstand ／ käuflich「金で買える、売り物の」／ erwarb ＜ erwerben 「～を入手する」／ einsah ＜ einsehen 「～を覗き見る、閲覧・閲読する」／ das Verfahren「振る舞い、やり方、処理方法」＜ verfahren「…のやり方をする」rücksichtslos verfahren 「無遠慮に振る舞う、わがままなやり方をする」／ das Antlitz「顔」／ ruhen「休息する、静止・停止する」／ auf 3 格 beruhen「～に基づく、起因する」／ die Berührung「接触、関係」＜ berühren「4 格に触れる」

文法注釈

最初の文で、写真と人物写真との関係がまだまだ密接なものでなかったことを述べたのち、二つ目の文章では副詞 noch が 3 度繰り返されている。最初の noch は新聞がまだまだ個人が購入するものではなかったこと、二つ目の noch はまだまだ写真が報道の道具となっていなかったこと、三つ目の noch では人物名が新聞に載るのはごく稀だったとされている。二つ目の noch のあとの所有冠詞 ihr は Zeitungen を受け、noch sahen die wenigsten Menschen ihren Namen gedruckt の ihr は Meschen を受ける。また gedruckt は drucken の過去分詞で、感覚動詞 sahen の目的語である ihren Namen を補う目的格補語。むろん drucken は「～を印刷する」という他動詞なので過去分詞は原則として「受動・完了」の意味となる。「印刷されて」／ein Schweigen um sich, in dem der Blick ruhte. 動詞 schweigen を ein Schweigen と中性名詞化し、それを前置詞＋関係代名詞の組み合わせの in dem…で受けている。／zwischen Aktualität und Photo: それぞれ名詞の性は die Aktualität「時局性、アクチュアリティ」、das Photo「写真」だが、冠詞が使われていない。冠詞がないのは両者が対語（対概念）と意識されているため。最後の dass 文章の主語 die Berührung の前には四つ目の noch が配置されている。

順送り訳

これら最初の複製された人間は品行方正に、あるいは言葉を換えれば、なんの添え書きもなく写真術の視界のなかに入り込んだ。いまだ新聞が贅沢品であり、それを人はめったなことではお金を出して買うこともなく、むしろカフェで閲読するものだったが、いまだ写真を使うことがその（新聞の）道具となってしまっていなかったし、いまだほんのわずかな人間が自分の名前が印字されているのをみただけだった。そこに（写った）人間の顔には、周囲に

沈黙があり、そこで視線は静止したのだ。手短に言うなら、こうした肖像芸術はすべて以下のことに基づいている、すなわち時局性と写真との間の接触が生じていなかったということに。

Auf dem Edinburgher Friedhof von Greyfriars sind viele Bildnisse Hills entstanden – nichts für diese Frühzeit bezeichnender, es sei denn, wie die Modelle auf ihm zu Hause waren. Und wirklich ist dieser Friedhof nach einem Bilde, das Hill gemacht hat, selbst wie ein Interieur, ein abgeschiedener, eingehegter Raum, wo, an Brandmauern gelehnt, aus dem Grasboden Grabmäler aufsteigen, die, ausgehöhlt wie Kamine, in ihrem Innern Schriftzüge statt der Flammenzungen zeigen.

語彙

Edinburgher ＜ Edinburgh「エディンバラ」（地名）に er がついたもの「エディンバラの」／ der Friedhof「墓地、霊園」／ Greyfriars 「グレイフリアーズ」（地名）／ Bildnisse ＜ das Bildnis「肖像（画・写真）」／ die Frühzeit「初期、創成期」／ bezeichnender ＜ bezeichnend「特徴的な」の比較級 ＜ bezeichnen 「表示する、4 格の特徴を述べる」／ das Interieur「室内、室内装備」／ abgeschieden「隔絶した、死亡した」＜ abscheiden「～を分離する」自動詞としては「死ぬ」／ eingehegt ＜ einhegen「～を垣根、柵などで囲む」／ die Brandmauer「防火壁」＜ der Brand「火災」＋ die Mauer／gelehnt ＜ lehnen「寄りかかる」「～を立てかける」／ der Grasboden「芝生」＜ das Gras + der Boden／ Grabmäler ＜ das Grabmal「墓石、墓標」＜ das Grab「墓」＋das Mal「記念碑」／ aufsteigen 「立ちのぼる、現れる」／ ausgehöhlt ＜a ushöhlen「～をくり抜く」／ Kamine ＜ der Kamin 「（壁面などに作りつけの）暖炉」／ Innern ＜ das Innere(形容詞変化)、3 格なので形式通りの語尾をつけると dem Inneren となるが、最後の e が弱化し省かれている。「内部」／ Schriftzüge ＜ der Schriftzug「書体、筆致」＜ die Schrift + der Zug「流れ」／ Flammenzungen「チロチロと燃える炎」＜ die Flamme「火炎」＋ die Zunge「舌」

人名･用語解説

Greyfriars　イギリスの宗教改革後、最初に建設された教会「グレイフリアーズ教会」。エディンバラ大学の近くにある、現在では観光スポットのひとつ。

文法注釈

nichts für diese Frühzeit bezeichnender, es sei denn, wie die Modelle auf ihm zu Hause waren. bezeichnender と比較級が使われているため、比較の対象を示さないといけない。こういう場合現代では als が使われるが、wie にも比較の対象を示す機能がある。auf ihm の ihm は墓地 der Friedhof を受けている。／es sei denn: 成句としては dass 文章とともに「…なのは別として」という表現もあるが、ここでは「実際にそうであれ」（接続法第 1 式を用いた認容文）

／ Und wirklich....「で、実際に～だから」と前文の判断の原因や理由を述べている／das Hill gemacht hat, は dem Bilde（古風な 3 格語尾）を先行詞とする関係文／wo, an Brandmauern gelehnt, aus dem Grasboden Grabmäler aufsteigen, wo は Raum にかかる関係副詞だが、主語は Grabmäler で墓地の墓標全体をいうために無冠詞で使われており、動詞は定形後置の原則により前つづりが分離していない aufsteigen。間に挟まっている an Brandmauern gelehnt は分詞構文で意味上の主語は、当然 Grabmäler ゆえ、gelehnt は自動詞「寄りかかる」の過去分詞となる。すなわち「能動・完了」の意味「防火壁に寄りかかって」であって「立てかけられて」ではない。＜墓標は防火壁に寄りかかりながら芝生の地面からせり上がってきている＞／die, ausgehöhlt wie Kamine, in ihrem Innern Schriftzüge statt der Flammenzungen zeigen. die 以下は Grabmäler を先行詞とする関係文、またしても分詞構文 ausgehöhlt wie Kamine が挿入されているが、aushöhlen が「～をくり抜く」という意味の他動詞なので、「暖炉のように穴があけられて」と「受動・完了」の意味。意味上の主語は関係代名詞 die であり、先行詞 Grabmäler であることは言うまでもない。2 格支配の前置詞 statt が使われていることにも注意。

順送り訳

エディンバラのグレイフリアーズ教会墓地でヒルの写真の多くが生み出されたが、モデルたちはそこで寛いでいる、実際にそうであれ、これほどこの創成期にとって特徴的なことはない。で、実際にこの霊園はヒルが写した写真のひとつによれば、まったく屋内の設えそのもの、隔絶され柵で囲まれた場所なのだ。そこでは、防火壁に寄りかかり、芝生の中から墓碑が立ち上がっている、それらは、備え付けの暖炉のように穴があけられていて、その内部には炎ではなく墓碑銘があるのだ。

Nie aber hätte dies Lokal zu seiner großen Wirkung kommen können, wäre seine Wahl nicht technisch begründet gewesen. Geringere Lichtempfindlichkeit der frühen Platten machte eine lange Belichtung im Freien erforderlich. Diese wiederum ließ es wünschenswert scheinen, den Aufzunehmenden in möglichster Abgeschiedenheit an einem Orte unterzubringen, wo ruhiger Sammlung nichts im Wege stand .

語彙

Geringer ＜ gering「わずかな」の比較級／ die Lichtempfindlichkeit「感光性」＜ das Licht + die Empfindlichkeit ＜ empfindlich 「感じやすい、反応しやすい」／ die Belichtung（写真用語）「露出、感光」＜ belichten「～を光にあてる」／ wiederum「再び、もう一度」／ wünschenswert「好ましい」＜ wünschen + s + wert（wert は動詞の不定形につけて「～する価値のある」等の形容詞を作る接尾辞）／ unterbringen「～を…（in + 3 格など）にしまう、格納する」／ 3 格 im Wege stehen「3 格の邪魔になっている」

文法注釈

dies Lokal 指示代名詞 dieser が中性名詞を規定する場合、1 格と 4 格形はふつう dieses となるが、この dies は中性名詞の 1 格か 4 格につく場合の別形／ Nie aber hätte dies Lokal zu seiner großen Wirkung kommen können, wäre seine Wahl nicht technisch begründet gewesen. この 1 文には注目すべき文法上の特徴が三つある。一つには仮定を示す wenn が省略されていること、二つには文の前半も後半もともに接続法第 2 式の過去（直接法過去完了の助動詞 hatte を hätte に、war を wäre に変えたもの）が使われている。最後は助動詞の扱いである。まず第 1 点目、この文のどちらが wenn を略したものとみなせるかというと、wenn を省略するには定動詞を文頭に置く必要があるため、後半部分が条件節ということになる。つまりわかりやすく書くと Wenn seine Wahl nicht technisch begründet gewesen wäre「この選択が機械技術によって根拠づけられていなかったのなら」（第 2 式なので実際には「根拠づけられていた」）、hätte nie dies Lokal aber zu seiner großen Wirkung kommen können「この場所が大きな作用力に達することなどできなかった」（実際には「貢献すること大だった」）。この仮定部と結論部が逆になり、しかも仮定部の wenn が略されていたことになる。この形式にはがんらい定動詞を文頭に位置させる願望文「Hätte ich Flügel !」（翼があればなあ！）などが、wenn のある条件文の形式「Wenn ich Flügel hätte,」と同じものとみなされるようになったという歴史がある。最後に助動詞が können となっているが、hätte とともに接続法第 2 式過去（過去完了形のような形）を作らねばならないとしても、過去分詞の目印である ge のついた gekonnt という過去分詞形がない。それもそのはずで gekonnt は können を単独で本動詞として使う場合の過去分詞形、könenn を助動詞として使った場合の過去分詞は können なのである。／下線を引いた es は何かを予示する形式上の目的語であり、本主語は den Aufzunehmenden in möglichster Abgeschiedenheit an einem Orte unterzubringen,という長い不定詞句。不定詞句のなかの den Aufzunehmenden は動詞 aufnehmen「撮影する」を zu 不定詞 aufzunehmen とし、さらに d という語尾をつけた未来受動分詞 aufzunehmend「撮影されるべき」を名詞化したもの。「その撮影されるべき人」＝被写体となる人物（男性単数 4 格）。最後の wo ruhiger Sammlung nichts im Wege stand は Orte (やはり古風な単数 3 格語尾)にかかる関係副詞節。関係文の主語は ruhiger Sammlung ではなく nichts、「静かな集中を邪魔するものが何もない場所」。

順送り訳

しかしこの場所がその大きな作用力に達することはできなかったろう、その選択が機械技術上の理由がなかったとしたら。初期の種板の、より弱い感光力は戸外での長い露光を必要とした。これがやはりそれを望ましいものと思わせたのだ、撮影されるべき人をある場所に、そこには静かな集中を邪魔するものがなにもないような、できるだけ隔絶した状態におくことを。

»Die Synthese des Ausdruckes, die durch das lange Stillhalten des Modells erzwungen wird, sagt Orlik von der frühen Photographie, ist der Hauptgrund, weshalb diese Lichtbilder neben ihrer Schlichtheit gleich guten gezeichneten oder gemalten Bildnissen eine eindringlichere und länger andauernde Wirkung auf den Beschauer ausüben als neuere Photographien.«

語彙

die Synthese「合成、混ぜ合わせて何かを作ること、統（綜）合」／ das Stillhalten ＜ stillhalten「じっとしている、動きを見せない」を中性名詞化したもの／ erzwungen ＜ erzwingen「～を力ずくで手に入れる、無理強いする」の過去分詞。非分離前つづり er なので ge-がない／ der Hauptgrund「主な理由」＜ der Haput「頭部、中心人物」＋ der Grund／ weshalb「なぜ」（疑問副詞）、「そのために」（関係副詞）」／ die Schlichtheit「質素、率直、単純」＜ schlicht「質素な、率直な、単純な」／ eindringlicher ＜ eindringlich「強く訴えかける、強烈な」の比較級 ＜ eindringen「入り込む、auf 4 格とともに～に襲い掛かる」／ andaueandauernd「持続的な」＜ andauern「長く続く、持続する」／ der Beschauer「観察する者」＜ beschauen「～を熟視する、吟味する」／ ausüben「～を行う、及ぼす」

文法注釈

die durch das lange Stillhalten des Modells erzwungen wird は Die Synthese を先行詞とする関係文／ weshalb 以下は Hauptgrund を説明する付加語文。従属節ゆえ定動詞は文末が基本だが、比較の対象を示す als neuere Photographien が定動詞よりもさらに後置されている。比較級は eindringlicher「より強烈な」という形容詞、および andauernde という現在分詞の付加語用法（形容詞）を修飾する副詞 länger「より長く」／ weshalb 以下の文の骨組み：主語は diese Lichtbilder　目的語は eine eindringlichere und länger andauernde Wirkung　定動詞 ausüben／ gleich guten gezeichneten oder gemalten Bildnissen の gleich は 3 格名詞とともに「～のように、～にも似て」という意味で用いる副詞。

人名･用語解説

Orlik：エミール・オルリーク（Emil Orlik 1870-1932）。オーストリア＝ハンガリー帝国のプラハ生まれの画家。銅版画や石版画も制作した。日本の版画技術を学ぶため来日、1900年から1901年にかけて滞在したこともある。

順送り訳

》表現の合成、それはモデルの長時間の静止によって否応なくそうなったもので、とオルリークは初期の写真について述べるが、これが主な理由なのだ、つまりなぜこれらの写真が、その簡素さとともに、素描画あるいは彩色画のように、最近の写真よりもより強く訴えかけ、より長く持続する作用を観る者に及ぼすことの。《

Das Verfahren selbst veranlaßte die Modelle, nicht aus dem Augenblick heraus, sondern in ihn hinein zu leben; während der langen Dauer dieser Aufnahmen wuchsen sie gleichsam in das Bild hinein und traten so in den entschiedensten Kontrast zu den Erscheinungen auf einer Momentaufnahme, die jener veränderten Umwelt entspricht, in der es, wie Kracauer entschieden bemerkt hat, von emselben Bruchteil einer Sekunde, den die Belichtung dauert, abhängt, » ob ein Sportsmann so berühmt wird, daß ihn im Auftrag der Illustrierten die Photographen belichten«.

語彙

das Verfahren「やり方、方法」＜ verfahren「…のやり方をする、振る舞う」／ veranlaßte（現代正書法なら veranlasste）＜ veranlassen「4 格の心を動かして zu 不定句をさせる」／ in 4 格 hinein「～の中へと」／ hineinwachsen「成長して～に達する、馴染む」／ entschieden「明白な、明らかな」＜ entscheiden「決定する」の過去分詞だが形容詞として常用されてきている語のため「決定された」とはならない。／ der Kontrast「対照、対比」／die Momentaufnahme「スナップショット、早撮り写真」＜ der Moment＋die Aufnahme／Erscheinungen ＜ die Erscheinung「出現、現れ、外見」＜ erscheinen「出現する、発刊される、3 格には～と思われる」／ verändert ＜ 他動詞 verändern の過去分詞形「変えられてしまった」／ entspricht ＜ entsprechen 「3 格に適合する、かなう」／ der Sportmann「スポーツマン」／ im Auftrag「委託を受けて」／ der Illustrierten ＜ die Illustrierte 「グラビア雑誌」＜ illustriert「挿絵、写真、図番の入った」＜ illustrieren「挿絵をつける、図解する」

文法注釈

下線部 während der langen Dauer dieser Aufnahmen、この während は持続やコントラストを表現する接続詞ではなく、2 格支配の前置詞「～の間に、～の間じゅう」／「;」以下の構造をわかりやすくすると Sie wuchsen …und traten …auf einer Momentaufnahme までが主文であり、この Momentaufnahme を先行詞とする最初の関係文 die----entsprciht が続き、そのなかの Umwelt を先行詞とする第 2 の関係文 in der es, ----- abhängt が続き,さらにこの中に Bruchteil を先行詞とする第 3 の関係文 den die Belichtung dauert が入れ込まれている。しかも第 2 の関係文の主語 es は形式主語で、本主語はクラカウアーからの引用文 ”ob ein Sportsmann so berühmt wird, daß ihn im Auftrag der Illustrierten die Photographen belichten” という従属節という構成。von demselben Bruchteil einer Sekunde, den die Belichtung dauert の demselben Bruchteil ＜ derselbe＋名詞は関係代名詞 den の相関詞であり、関係文が規定するものを確定的に表現している。「一秒のうちの、感光に要するその何分の一かに」abhängt「左右される」という呼応関係である。

人名･用語解説

Kracauer：ジークフリート・クラカウアー（Siegfried Krakauer 1889－1966）。ドイツ、フランクフルト生まれの批評家、社会学者。ユダヤ系ゆえ、フランス、次いでアメリカ合衆国に亡命。ニューヨークで死去。代表作に『カリガリからヒトラーまで』(1947)など。

順送り訳

この撮影方法自体がモデルたちを、瞬間から抜け出すのではなく、その中へ向けて生きさせた。（だから）この撮影が長時間続いている間に、彼らはいわば成長して画像の中へ達し、早撮り写真の写像とはまったくの好対照を描くことになったのだ、それ（早撮り写真)はあの変化させられてしまった環境に対応するもので、その（環境）中では、クラカウアーがはっきりと述べているように、1 秒の何分の 1 かに、そのあいだ感光が続くのだが、 》ひとりのスポーツマンが、グラビア雑誌の委託で写真家たちが彼にカメラを向けるほど、有名になるかどうか《　がかかっているのだ。

Alles an diesen frühen Bildern war angelegt zu dauern; nicht nur die unvergleichlichen Gruppen, zu denen die Leute zusammentraten - und deren Verschwinden gewiß eins der präzisesten Symptome dessen war, was in der zweiten Hälfte des Jahrhunderts in der Gesellschaft vorging - selbst die Falten, die ein Gewand auf diesen Bildern wirft, halten länger. Man betrachte nur Schellings Rock; der kann recht zuversichtlich mit in die Unsterblichkeit hinübergehen; die Formen, die er an seinem Träger annahm, sind der Falten in dessen Antlitz nicht unwert. Kurz,alles spricht dafür, Bernhard von Brentano habe mit seinerVermutung recht, 》daß ein Photograph von 1850 auf der gleichten Höhe mit seinem Instrument stand《 - zum ersten- und für lange zum letztenmal.

語彙

angelegt「～の素質がある」＜ anlegen「～をあてがう、～を与える」／ unvergleichlich「比較できない」＜ vergleichen「～を mit 3 格と比較する」、der Vergleich「比較」／ eins 不定代名詞で中性名詞を受けて「ひとつ、あるもの」／ präzis「明確な、的確な」／ Symptome ＜ das Symptom「兆候、前兆」／ vorging ＜ vorgehen「進行しつつある、行われる」／ Falten ＜ die Falte「しわ、折り目、ひだ」／ das Gewand「衣服、衣装」／ der Rock 現代語では女性のスカートだが、古くは「男性用の上着」／ zuversichtlich 「確信にみちた、自信をもって」／die Unsterblichkeit「不死、不滅」＜ unsterblich「不滅の」＜ sterblich「死すべき運命の」＜ sterben「死ぬ」／ hinübergehen 「向こう側に渡っていく」／ annahm ＜ annehmen「～を受け入れる、（外観を）呈する」／ der Träger「着用者、運ぶ人、」＜ tragen／ unwert「2 格とともに、～に値しない」＜ wert 4 格または 2 格とともに、「～の価値がある」／ dafür sprechen　dass 文章などと結んで「…を物語っている」die Vermutung ＜ vermuten .

文法注釈

nicht nur: nicht nur A, sondern auch B という相関表現があるが、ここでは 下線を施したように nicht nur die unvergleichlichen Gruppen「比べるもののないような集団だけではなく」と、ハイフンの次の selbst die Falten「ひだでさえも」とで相関表現を作り出している。／ zu denen die Leute zusammentraten は die unvergleichlichen Gruppen を先行詞とする関係文／deren Verschwinden の deren は die unvergleichlichen Gruppen を受ける関係代名詞の 2 格／ eins der präzisesten Symptome は「もっとも明確な兆候のひとつ」「大変明確な兆候」だが、続く dessen は続く関係文を予め規定する相関詞として働く指示代名詞 das の 2 格形。その関係文は不定関係代名詞節 was in der zweiten Hälfte des Jahrhunderts in der Gesellschaft vorging「その世紀の後半に社会で進行しつつあったもの」であり、その「もっとも明確な兆候のひとつ」／ Man betrachte nur Schellings Rock の betrachte は接続法第 1 式で「～せよ」と要求を示している／ der kann recht zuversichtlich mit in die Unsterblichkeit hinübergehen の der は直近の男性名詞を受ける指示代名詞男性 1 格形、直後（第二位）に定動詞 kann が来ているため関係代名詞ではないことは明白／ die er an seinem Träger annahm は die Formen を先行詞とする関係文で、er は「上着 der Rock」を、所有冠詞 sein もこの「上着」を受けている／ in dessen Antlitz の dessen は der Träger「着用者」を指す指示代名詞の 2 格形／ dafür, dass------なら動詞は文末だが、dass がないので主文扱いで動詞は第 2 位に位置している。大事なのは主語が Bernhard von Brentano であるのに、定動詞が hat にならず habe となっている点。接続法第一式を用いて、この言葉が引用（間接話法）であることを明確に示している。

撮影された老哲学者シェリングの顔の皺とその衣服の襞や形とを同列に評価する(奇妙な)一文について。これはおそらく 1924 年に公刊され好評だったベラ・バラージュの**無声映画論**「目に見える人間 Der sichtbare Mensch」の発想を踏襲している。「Aber der Schauspieler, der nichtspricht, wird in seinem ganzen Körper zu einer homogenen Ausdrucksfläche, und jede Falte seines Kleides bekommt die Bedeutung, die eine Falte in seinem Gesicht hat.」（しかし声を出すことをしない俳優は自分の全身で均質な表現面となる、つまり彼の衣装のどの襞も、彼の顔の皺と同じ意味を得るのだ）。Balázs Béla, Der sichtbare Mensch 2001 Frankfurt a. M.（Suhrkamp）39 頁。

人名･用語解説

Schelling：フリードリヒ・シェリング（Friedrich Wilhelm Joseph Schelling 1776-1854）はフィヒテ、ヘーゲルと並ぶドイツ観念論哲学を代表する哲学者。幼少より天才の誉れ高く、23 歳の若さでイェーナ大学の教授に抜擢される。テュービンゲン神学校ではのちの詩人ヘルダーリン、哲学者ヘーゲルの同窓だった。

Bernhard von Brentano（ベルンハルト・フォン・ブレンターノ1901-1964）。ドイツの作家。代表作に長編小説『テオドール・シンドラー』（1936）など。

順送り訳

これら初期の写真ではすべてが持続する素質がある。あの比較しようもない集団ばかりでなく、そこへあの人々が集まってきていたのだが、-それら（集団）の消滅は確かに、あの世紀の後半に社会の中で生じたことの、もっとも明確な兆候のひとつなのだ-これらの写真において衣服が作り出す襞でさえ、より長く保持される。まあシェリングの上着を見てほしい。これはまさしく確信をもって不滅の世界に移り行くことができる。それがその着用者にあわせて作り出す形は、その顔の中の皺に引けを取るものものではないのだ。手短かに言えば、すべてが、ベルンハルト・フォン・ブレンターノの推測が正しかったのを、証している。すなわち　》1850 年の写真家はその器具と釣り合いが取れていた《 と。-これは最初のことであり、そして長い間、最後のことでもあった。

（訳者注記：本訳稿「復刻・対訳（順送り訳）・評釈の試み 2」　はベンヤミンの第 1 回連載の後半部にあたります）

.....

【著者紹介】

三ツ木道夫 (MITSUGI Michio):

1953 年生まれ。上智大学大学院文学研究科満期退学。博士（比較社会文化）（九州大学）、編訳書『思想としての翻訳』（白水社　2008 年）など。

MITIS Journal of Translation and Interpreting Studies 投稿規定

1. 投稿の資格

著者（筆頭著者および共著者）が MITIS の研究員*であること。ただし編集委員会が認めたもの、あるいは編集委員会から依頼された原稿はこの限りではない。

*研究員になるためには、(1)氏名 (2)所属・職名(フリーランスの場合はその旨を明記) (3)略歴（5～ 10 行程度） (4)研究分野 (5)必要な場合は郵便物転送用の住所 (6)推薦者 1 名（いなくても可）を記したメールを水野のメールアドレスまでお送り下さい。(a-mizuno@fa2.so-net.ne.jp)審査の上決定します。

2. 原稿の種類

原稿の種類は、研究論文、研究ノート、報告（実践、調査、学会等）、資料、エッセイ、書評等である。

3. 投稿の方法

1) 投稿は電子メールに添付して送付する。
2) メールの送付先は、MITIS Journal of Interpreting and Translation Studies 編集委員会とする。メールアドレスは a-mizuno@fa2.so-net.ne.jp
3) メール本文中に、提出日、論文題目（日本語論文の場合は英文の題目も明記する）、所属・職名、著者略歴、電子メールアドレス、電話番号を記載すること。

4. 原稿執筆要領

1) 投稿原稿は原則として Word ファイルで作成することとする。
2) A4 判横書きで、字数・行数は 38 字×37 行、フォントは日本語が MSP 明朝、英語は Times New Roman とし、いずれも 10.5 ポイントを使用する。
3) 投稿原稿の長さは本文、文献、図表を含めて 20 枚以内とする。但し編集委員会が認めたものはこの限りではない。
4) 使用言語は日本語ないし英語とする。
5) 論文と研究ノートの場合、日本語の原稿には英文アブストラクトをつけること。長さは 200 words 以内とする。（英文原稿の場合も同様。）
6) 脚注境界線以外の線を絶対に入れないこと。
7) ページ番号を入れないこと。

5. 原稿の採否

1) 投稿原稿の採否は、査読を経て編集委員会が決定する。
2) 採否の通知は投稿者へのメールによって行う。
3) 査読の結果修正を求められた場合、修正原稿は編集委員会が定めた期日までに再提出すること。期日までに再投稿されない場合は、投稿を取り下げたものとみなす。大幅な修正が必要とされる場

合には、改稿の上次号に再投稿するようすすめることがある。

4) 査読委員あるいは編集委員会の判定により、原稿の種類の変更を著者に求めることがある。これは主に研究論文と研究ノートの間の変更になる。
5) 最終投稿原稿を受け付けた時点をもって「受理」とする。
6) 著者校正は一度のみ行う。（この時点は語句の誤りの訂正などにとどめ、それ以上の加筆修正は認めない。）

6. 著作権

掲載された著作物の著作権は本誌に所属する。ただし著者は非営利目的で複製し、翻訳することができる。その場合はその著作物が本誌に掲載されたものであることを明記すること。

7.その他、文献の表記などは暫定的に『通訳翻訳研究』の投稿規定にあるものを参照して下さい。

＜研究倫理について＞

＊執筆にさいして考慮すべき研究倫理について以下に一般的な指針を述べますが、大学等研究教育機関に所属されている方は、当該大学ないし機関で設けている研究倫理指針に従って下さい。

○論文として投稿する際には適正な倫理的配慮が行われていなければならない。

1. 論文投稿においては捏造、改ざん、盗用などの不正行為は認められない。

1a. 捏造とは、存在しないデータ、研究結果、文献などを作成することを言う。

1b. 改ざんとは、研究資料、研究プロセスを変更して、得られた結果を加工することである。

1c. 盗用とは、他の研究者などのアイディア、方法、データ、結果、論文の内容などを、了解を得ないで、あるいは適切な表示なしに流用することを言う。

2. 以下のような不適切な発表方法をとらないこと。

2a. 二重投稿：著者自身がすでに公表していることを告知せずに、同一内容の原稿を投稿し発表することを言う。

2b. 業績の水増し：既発表の論文に内容が類似し、その論文を発表することの意義を認めるのが困難で、査読を担当する研究者に無用な手間を強いるような原稿を投稿すること。

2c. 利益相反 Conflict of interest：経済面での利益や損失などの利害関係のために、論文の客観性に影響を与えたり、あるいは与えるおそれがあるとみなされたりすることを言う。

3. 著作権

3a. 著作権に関する規定やガイドラインを参照し適切に利用すること。

3b. 他人の著作物（図表を含む）を利用する場合には著者の了解が必要である。著作権が出版社などにある場合は出版社の許可が必要になる。

3c. ただし著作権法の保護対象外の著作物、保護期間終了後の著作物、許された目的と範囲内での引用、教育や試験のための利用は著作権者の了解は不要である。
3d. 引用は適切に行う（出典の明記など）。

4. インフォームド・コンセント Informed consent
被験者を使う場合、研究者は被験者に対し研究について事前に十分な説明を行い、その意義、目的、方法等を理解させ、被験者となること及びデータ等の取り扱いに関して被験者の自由意志に基づく同意を得ていなければならない。

5. 個人情報の保護について
5.a 研究を公表する際には被験者を特定できないようにすること。
5.b インフォームド・コンセントを得る際に説明した以上の個人情報を取得しないこと。
5.c 個人情報を不正な手段により取得しないこと。
5.d 個人情報が漏洩しないよう安全管理を行うこと。

＊詳しくは、日本学術振興会「科学の健全な発展のために」をご覧ください。
http://www.ritsumei.ac.jp/research/file/rinri.pdf

編集後記

MITIS Journal 7 号をお届けします。

今回も諸般の事情で発行が一か月遅れました。謹んでお詫び申しあげます。
7 号には二編の論文があります。南津さん他の論文は離日逐次通訳の訓練において、学生の被験者が英語の無生物主語の構文をどのように日本語に逐次通訳するかを、「塲」の理論を導入して分析したものです。セランドさんの論文は、児童文学における翻訳の姿勢を、「しゃがむ翻訳」という仮説によって、2 つの邦訳を対照研究しています。
本号には論文翻訳があります。秋草さんの手になるジゼル・サピロの論考は、文学作品が国境を越え、「世界文学」の場に参与する時どのようなことが起きるかを考察しています。本文でも触れられているようにその中には翻訳も当然含まれます。論文はコンパクトに世界文学の論点をまとめており、翻訳する意義は大きいと思いました。

MITIS Journal は、「熱」や「志」が感じられる論考であればできるだけ掲載していきたいと思います。
次号の締め切りは 2024 年 4 月末日とします。多くの投稿をお待ちしています。

2023 年 12 月 26 日
編集長　水野　的

水野翻訳通訳研究所 (MITIS)
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-3-3
パレス御茶ノ水 1 号館 402
a-mizuno@fa2.so-net.ne.jp
https://mitis.webnode.jp/